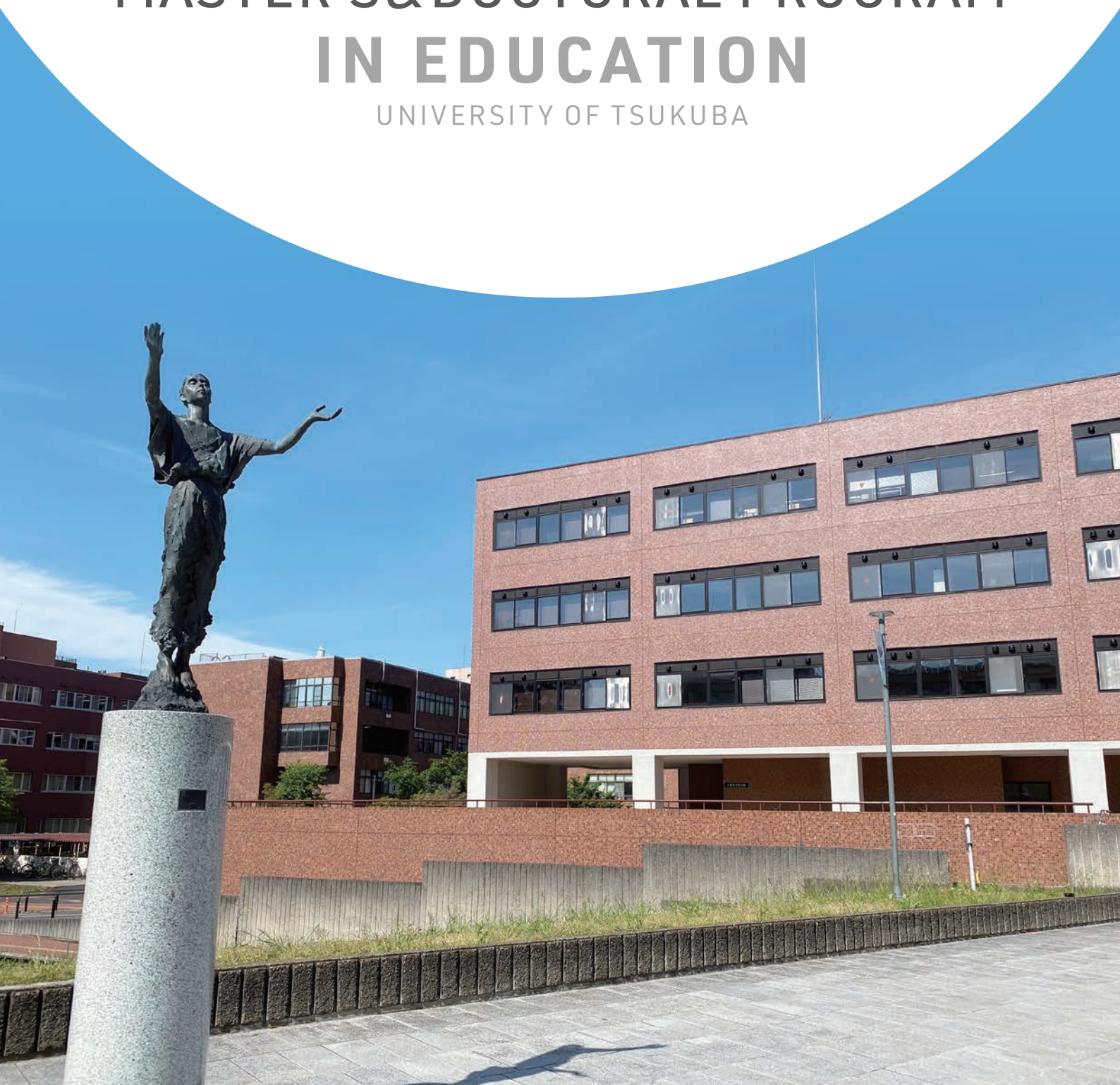
筑波大学 University of Tsukuba 2024

筑波大学大学院 **博士前期・後期課程**

教育学学位プログラム

MASTER'S&DOCTORAL PROGRAM IN EDUCATION

UNIVERSITY OF TSUKUBA



筑波大学の教育学のあゆみ

詳細はこちら→
筑波大学の教育学のあゆみ（アーカイブ）

師範学校の設立（1872年）

高等師範学校（1886年）

東京教育大学（1949年）

筑波大学（1973）

学位プログラム制
への移行（2020年）

目次

ご挨拶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 01
教育学学位プログラムの構成 ・・・・・・・・・・ 02
国際教育サブプログラム ・・・・・・・・・・・・・・ 04
次世代学校教育創成サブプログラム ・・・・ 07
学校教育領域
スクールリーダーシップ開発分野 ・・・ 08
英語教育分野 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 09
芸術科教育分野 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
保健体育教育分野 ・・・・・・・・・・・・・・ 11
国語教育領域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
社会科教育領域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
数学教育領域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
理科教育領域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
教育基礎科学サブプログラム ・・・・・・・・・・ 16
博士後期課程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
留学生の受入れ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
社会人の受入れ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
二足のわらじ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
修了要件 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
年度別学位授与数/年度別受験者・入学者数 ・・・・・・ 24
担当教員一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
お問い合わせ等 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

ご挨拶

教育学学位プログラムリーダー
藤田 晃之

筑波大学大学院は、2020（令和２）年４月から学位プログラム制という新しい仕組みに移行し、教育学学位プログラムは、人間総合科学学術院の中の博士前期・後期課程のプログラムとしてスタートしました。前期課程は旧組織の人間総合科学研究科教育学専攻と教育研究科が、後期課程は教育基礎学専攻と学校教育学専攻とが統合された、新しい教育組織です。

教育学学位プログラムは、1872年（明治５年）に設置された師範学校に起源をもち、東京高等師範、東京教育大学を経て研究型総合大学である筑波大学へと続く系譜に位置づく、伝統と革新性を併せ持つ新しい学位プログラムです。

教育学学位プログラムは、次のような教育研究目的を有しています。

・グローバルな視野をもち研究力のある高度専門職業人を養成すること
・次世代を指向する教育学の先端研究拠点を形成すること

この目的を達成するために、学際性・国際性を重視する研究型総合大学の強みとこれまで培ってきた実績を生かして、特色ある教育活動を展開していきます。

現代の教育研究者および教育実践者には、人間の営みと社会の発展に対して教育がもつ意義と役割を体系的に理解し、地球的規模の広がりをもつ現代の教育課題を鋭敏に捉え、教育学諸分野の学術的アプローチを用いて分析する基礎的研究能力が求められています。**教育学学位プログラム（前期）**は、このようなニーズに応えるために、近代教育の展開とともに発展した日本の教育学の学統を引き継ぎつつ新しい研究動向に対応した３つのサブプログラム（国際教育サブプログラム、次世代学校教育創成サブプログラム、教育基礎科学サブプログラム）から構成されます。本学位プログラムは、様々なニーズのある多様な教育現場で卓越した専門的知見をもって課題解決をリードすることのできる教育研究者を目指す者、そして研究力のある教育実践者（教員）、高度専門職業人の育成を目指しています。

教育学学位プログラム（後期）は、教育の本質を解き明かし、現代の教育課題を考究し、教育学研究をより一層深化させるためのプログラムです。本学位プログラムでは、日本の教育学に新しい展望を取り入れる伝統と革新性の両方を併せ持つ教育学を築きあげる研究者を養成します。現代社会における教育は地球規模の多様で複雑な要因によって規定されており、我々が直面する教育課題を的確に把握して解決することは容易ではありません。本学位プログラムは教育学を構成する多くの専門分野から成り、それぞれの専門性を尊重しつつ、協働的な体制の下で、現代の教育課題に対峙できる研究者を養成します。また、全国の大学や研究機関等で活躍する一流研究者の先輩諸氏と研究交流できることも、本学位プログラムの大きな強みです。

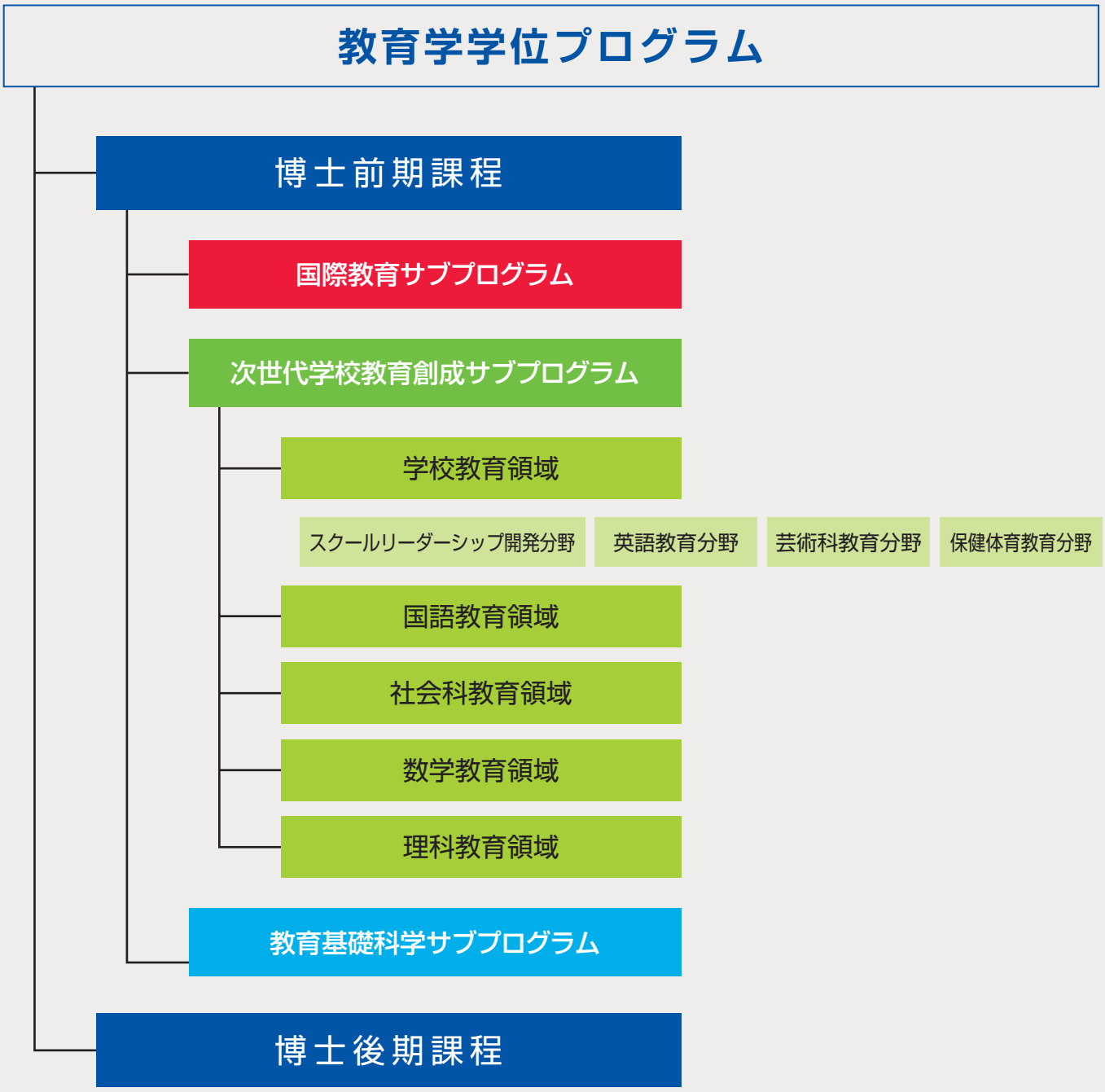
令和６年６月１日

教育学学位プログラムの構成

Master's & Doctoral Program in Education

筑波大学大学院は、2020年4月から全学が学位プログラム制に移行しました。学位プログラムでは、従来の専攻の壁を越え、幅広い学問分野の教員が協働して授業と研究指導を行い、学位取得時に学生が身につけるべき知識・能力を明確化し、目指す人材像に応じてそれを修得できるよう教育課程を設計しています。教育学学位プログラムは、博士前期課程の国際教育サブプログラム、次世代学校教育創成サブプログラム、教育基礎科学サブプログラム、及び、博士後期課程で構成されています。

博士前期課程の定員は計102人、博士後期課程の定員は20人です。入試では、一般入学試験に加えて、社会人特別選抜（国際教育、次世代学校教育創成、博士後期課程）、英語による特別選抜（国際教育）、及び現職教員1年制プログラム（次世代学校教育創成）を設定し、多様な志願者を求めます。



教育学学位プログラムの人材養成目的

博士前期課程

人間の営みと社会の発展に対して教育がもつ意義と役割を体系的に理解し、地球的規模の広がりをもつ現代の教育課題を鋭敏に捉え、教育学諸分野の学術的アプローチを用いて分析する基礎的研究能力を有し、多様な教育現場において卓越した専門的知見をもって課題解決をリードすることのできる研究力のある高度専門職業人を養成することを目的とします。

博士後期課程

社会の急激な変化のもと対応を迫られる教育の具体的課題と、地球的視野をもって解決されるべき教育の本質的課題のそれぞれについて、教育学の幅広い学問的知見を基盤として的確な研究方法をもって追究し、独創的な研究成果を国内外に向けて発信し、政策と実践の改革を国際的に先導することのできる教育学研究者ならびに高度専門職業人を養成することを目的とします。

教育学学位プログラムの3つのポリシー

詳しくはこちら→
教育学学位プログラム
大学院スタンダード

アドミッション・ポリシー

国内外の大学・研究機関等において教育学諸分野の教育・研究に従事する研究者を志す人材に加え、国内外の行政機関・国際機関等で教育学の学術的アプローチを用いて教育政策の効果分析、政策形成、教育開発援助等に従事する研究力のある高度専門職業人や、国内外の教育行政機関、学校、社会教育・生涯学習機関、NPO等の教育関連組織等で教育活動や人材育成をリードする研究力のある高度専門職業人を志す人材を募集します。教育学部等における教育学研究の経験者や教員養成系の学部等で職業人としての教員の資質・能力を獲得した者はもちろん、理学部や人文・社会学部などで培った高度な専門性と教育という人間の基礎的な営みとの関係に関心のある者や、学校に限定されない広範な人間のコミュニティにおける教育活動に関心のある者も、入学可能です。（博士前期課程）

ディプロマ・ポリシー

筑波大学の学位プログラムでは学生が修了時に身につけるべき知識・能力等を「コンピテンス」 として設定しています。教育学学位プログラムでは、ディプロマ・ポリシーに掲げる知識・能力として 9 項目を揚げています。

●汎用コンピテンス

1. 知の活用力　2. マネジメント能力　3. コミュニケーション能力　4. チームワーク力　5. 国際性

●専門コンピテンス

6. 教育課題発見能力　7. 教育内容探究能力　8. 教育学的分析能力　9. 教育課題解決

カリキュラム・ポリシー

教育学学位プログラム（博士前期課程）では、学生が教育学研究者に必要な基礎的な知識と、多様な教育学諸分野の専門的な知識の双方を獲得しつつ、教育研究活動を展開することを通して汎用／専門コンピテンスを獲得できるよう、授業科目を［基礎科目］、［専門基礎科目］、［専門科目］の３つに大別してカリキュラムを編成しています。また、第一種教員免許状を有している学生が専修免許状を取得する際に必要な科目を広範に設置することで、教育に係る高度専門職業人としての資格を獲得できるようにしています。

取得できる学位、資格

学位：修士（教育学）、博士（教育学）

資格：小学校教諭専修免許状、中学校教諭専修免許状（全教科）、高等学校教諭専修免許状（全教科）、養護教諭専修免許状、栄養教諭専修免許状、学校心理士、IB educator certificates（IBCTL, IBACTLR）、その他

（注）資格取得のためには既定の単位修得や試験合格等の条件が課されている場合があります。また、所属する課程、サブプログラム、領域、分野によって取得できる資格は異なります。

サブプログラムの紹介

国際教育サブプログラム

Subprogram in International Education

博士前期課程
Master's Program

博士後期課程
Doctoral Program

- **国際教育サブプログラム** Subprogram in International Education
- 次世代学校教育創成サブプログラム Subprogram in School Education for the Next Generation
- 教育基礎科学サブプログラム Subprogram in Education Sciences

国際教育に関する研究と学習を行い、修士の学位を取得するとともに、国際バカロレア教員資格（IB educator certificates）を取得できるプログラムです。教育における新しい理論と実践を理解し、国際教育に関する諸課題を研究する能力を修得することを通して、国際的視野をもった探究者を育成することを目的とします。国際教育の分野を牽引する教員及び研究者として、またグローバル化する社会におけるリーダーとして幅広く活躍できる人材を育成します。

The Subprogram in International Education strives to nurture international minded educators and researchers by providing an academic environment where they can gain a deeper understanding of new theories and practices in Education and develop the skills to conduct research on issues in International Education. Furthermore, it aims to cultivate individuals who can play an active role in Education as teachers and researchers, leading the field of International Education in the ever-changing society.

6つの特色
6 Special Characteristics

- **国際交流 国際性の養成** Develop International Mindedness
- **教育について専門的な学び** Learn with Experts in the Various Fields of Education
- **博士後期課程との接続** Explore the Pathway towards Higher Studies
- **学校現場の実践を経験** Learn through Theory and Practice
- **研究重視 研究力の習得** Acquire Strong Research Skills
- **IB教員資格の取得** Obtain IB Educator Certificates (IBEC)

国際教育サブプログラム

グローバル時代を牽引するリーダーの育成、IB教員資格の取得

変わる日本の教育

現在、グローバル化の進展やIT技術の長足の進歩に伴い、社会は大きく変化しています。国境を越えた紛争や環境問題は1か国で解決できる範囲を超えています。また、ロボットやAI（人工知能）の開発により、現在、存在している職業が10年後も同じように存在している保証はありません。このように、社会は大きな変革期を迎えており、日本の教育も社会の変化に対応するため、大学入試制度をはじめとした様々な改革が行われています。学校では知識量を増やす教育だけでなく、思考力、判断力、表現力、主体性をもって多様な人々と協働する態度の育成など21世紀型の学力と呼ばれる資質が重要視されるなど、「学力観」が根底から問い直されています。

国際バカロレア（IB）の導入

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。日本においても平成27年の閣議決定において、国際的に通用する大学入学資格が取得可能な教育プログラム（国際バカロレア：IB）の普及拡大を図り、IB認定校等を200校以上に増やす方針が決められました。本方針に基づき、IB教育を実施できる教員の養成が求められています。

本サブプログラムの教育目標

本サブプログラムでは国際的視野をもった探究者を育成することを目的とし、修了生は国際教育の分野を牽引する教員及び研究者として、またグローバル化する社会におけるリーダーとして幅広く活躍することが期待されます。本サブプログラムにおいては、教育における新しい理論を理解し、国際教育に関する諸課題を研究する能力を修得することを目指します。また、国際バカロレアを含む国際的な教育プログラムの教授法、カリキュラム、アセスメントについて学ぶことができます。加えて、国内外のIB校との協力・連携関係を構築し、実習等を通した経験的学習の機会を提供しています。

取得可能な教員資格

本サブプログラムでは、所定の単位を修得することによってIB教員資格を取得することができます。取得可能な教員資格はIB certificate in teaching and learning（IBCTL）とIB advanced certificate in teaching and learning research（IBACTLR）の２種類です。IBCTLは初等教育プログラム（PYP）、中等教育プログラム（MYP）、ディプロマ・プログラム（DP）に分かれています。IBCTLの取得には18単位（10科目）、IBACTLRの取得にはさらに６単位（３科目）を修得した上で諸要件を満たし、修士号を取得することが求められます。なお、修士号の取得には30単位が必要です。IB教員資格の取得は修了要件ではありません。専修免許取得には、別途単位の修得が必要になります。

本サブプログラムの求める人材

本サブプログラムでは、異なる価値観や多様性を尊重し、思考を深めることを志向する学生を求めます。とくに、教育における新しい理論を主体的に追求し、国際教育の分野に貢献しようとする熱意を有する学生の入学を期待します。

修了生の進路

修了生の多くが国内外の公立・私立のIB認定校（小・中・高）やインターナショナル・スクールに就職しています。また、IB教員養成課程を開設する大学に勤務したり、大学において研究者としての道を歩んでいる修了生もいます。さらに、文教行政に携わるなど、国際教育に関連するさまざまな分野で活躍しています。

お問い合わせ先:
電話 029-853-6739
メール utie@un.tsukuba.ac.jp

注：英語で実施される授業は日本語でのサポートを行っています。

Subprogram in International Education

Developing Educational Leaders for the Changing World

What's happening in the World and Education?

Our world is rapidly changing due to globalization and continual advancement in IT. We are also facing various conflicts and environmental issues that no one country can solve by themselves alone. Now, with the relentless development of Artificial Intelligence (AI), it is not unthinkable that professions existing today will still function in the same way 5 to 10 years later. We are seeing societies worldwide constantly undergoing big and small changes day by day.
The same is true in Japan, where we find several on-going educational reforms in order to keep up with the changing society. All around the country, schools are reconsidering what "academic skills" are needed in the 21st Century and working in a diverse environment, by focusing not only on increasing knowledge but also nurturing students' abilities to make judgments, to express themselves, and to have agency.

What is the International Baccalaureate (IB)?

As an educational program, the International Baccalaureate aims to develop inquiring, knowledgeable and caring young people who help to create a better and more peaceful world through education that builds intercultural understanding and respect (IBO, N.D.). In Japan, the government started an initiative to increase the number of IB-authorized schools to 200, in order to promote the IB and to disseminate its mission to schools nationwide. As an educational program that allows students to obtain an internationally accepted university entrance qualification, it is expected to open more doors of opportunities for students to acquire international mindedness and pursue studies worldwide. Moreover, the curriculum of the IB and the Japanese national curriculum complement each other in their goals such as the use of inquiry-based learning, amongst others. Therefore, there is an urgent need to train teachers who are capable of implementing IB Education.

What are the aims of the program?

The aim of this program is to develop international minded leaders who are highly skilled and committed to address issues in International Education and the vast field of Education. Therefore, it strives to cultivate knowledge, skills, and concepts necessary for successful practice and research in our interconnected world.

What teaching certifications can I get from the program?

Students taking the Subprogram in International Education can obtain the IB Educator Certificates (IBEC) by taking the required set of courses. Two certifications are offered through the program: the IB Certificate in Teaching and Learning (IBCTL) and the IB Advanced Certificate in Teaching and Learning Research (IBACTLR). For the IBCTL, students can choose one programme (Primary Years Programme, Middle Years Programme, or the Diploma Programme). Students need to take the 10 required courses (18 credits) for IBCTL and additional 3 courses (6 credits) for IBACTLR. In total, students need to complete 30 credits to successfully acquire a Master' s degree. However, getting an IB Educator Certificate is not mandatory to complete the Subprogram in International Education.

Who is this program for?

This program is for students who have an understanding and profound respect for diversity and different values, together with a fervent desire to delve into a deep pursuit of knowledge. We welcome students who are eager to contribute to the field of International Education by proactively pursuing the development of new theories in the field of Education.

What is the typical career path after graduation?

Many of our graduates work as educators in IB-authorized schools and international schools in Japan and abroad. Some graduates work at universities that offer IB Teacher Training programs, while some pursue careers as researchers in the field of Education. In addition, graduates are actively working as educational leaders in various fields related to International Education.

Language of Instruction

Classes are held primarily in English with possible Japanese support.

Contact：
utie@un.tsukuba.acjp

サブプログラムの紹介

次世代学校教育創成サブプログラム

博士前期課程　博士後期課程

- 国際教育サブプログラム
- 次世代学校教育創成サブプログラム
- 教育基礎科学サブプログラム

「一つ先」の時代の学校教育のあり方、その社会との連関のあり方等について、多面的に、また根源的に考え、次世代の学校教育を創成することのできる人材の養成を目指す教育プログラムです。換言すれば、現代社会におけるさまざまな教育課題に対処しうる高度な専門性を有し、グローバルな視野と優れた教育実践力とともに、教職への情熱と使命感を持ち、リーダーシップを備えた高度専門職業人、これからの時代における新しい学校教育を創成することのできる人材を育成することを目的としています。

次世代学校教育創成サブプログラム 学校教育領域

スクールリーダーシップ開発分野

スクールリーダーと学習・生活支援コーディネータの養成

School Leadership and Professional Development

スクールリーダーシップ開発分野には、教育に対する多種多様な社会的要請に応えるべく、スクールリーダーコースと学習・生活支援コーディネータコースの二つのコースがあります。スクールリーダーコースでは、学校が直面する様々な問題を冷静に分析し、行政的・制度的条件を踏まえつつ問題解決に向けて学校の組織・経営をリードすることのできる能力の育成を目指しています。また学習・生活支援コーディネータコースでは、学校の課題に対応したカリキュラム開発や生徒指導・援助の改善方策を考え、その実践をリードすることのできる能力の育成を目標としています。

カリキュラム

カリキュラムは、教育学および心理学の二つの学問領域を中心として、各コースに対応する専門科目および共通科目から編成されています。現職教員等で教職経験がある場合は、修士論文に代えて実践研究報告書を執筆できます。大学卒業後ただちに大学院に進学する等、教職経験がない場合には、修士論文が課されます。

中学校および高等学校の教諭一種免許状を有する場合、所定の単位を修得すれば、教科等の別なく専修免許状を取得できます。さらに、所定の単位を修得すれば、学校心理士（一般社団法人学校心理士認定運営機構）の申請資格も取得できます。

平成28年４月に小学校教諭専修免許状取得にかかわる課程が設置されました。

学生指導

学校教育領域では、各学年にクラス担任をおき、きめ細かな修学・生活上の指導を行うことも特色です。研究指導では、領域単位での発表会や審査会の実施に加え、個別指導や研究会が開催されています。在籍者は、教育委員会から派遣された現職の教員（１年制プログラムを含む）、学部段階で教育学や心理学以外の専門だった者、社会人特別選抜を経て入学した者、留学生等と、実に様々なキャリアを有しています。学部を卒業してすぐ本専攻に入学する者も多くおり、いずれの学生に対しても、懇切丁寧な指導・対応を行っています。

修了生の進路

修了生の進路のうち多いのが中・高等学校教員であり、本分野では各教科にわたっています。現職派遣教員の場合は職場へ復帰され、スクールリーダーとして研究成果を活かしています。また、各種官公庁（教育事務所、少年鑑別所、一般職等）や児童相談所カウンセラーに就職する場合もあります。さらに、本学をはじめとする国内外の博士課程への進学や、大学等研究機関に就職する修了生もいます。

主な就職先

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教員	10	10	8	7	5	1
官公庁	0	0	0	1	1	1
企業・団体	3	2	2	1	5	2
現職復帰	4	2	2	1	3	3
進学	1	0	2	1	0	0

修了生の声

岡田真衣（令和3年度修了）（群馬県 太田市立西中学校 教諭）

私は学部から問い続けてきた「日本における外国にルーツをもつ子どもの母語・母文化」について、現在の外国にルーツをもつ子どもたちを取り巻く学校制度や歴史的背景から包括的に捉えていきたいと考え、他大学から本専攻へ入学しました。コロナ禍での入学当時はさまざまな不安を抱いていましたが、修士論文を執筆し、先の問いに対して向きあい続けることが出来たのは、熱心にご指導いただいた先生方や、ともに切磋琢磨しあうことのできる仲間の存在があったからです。筑波大学で教育学を学ぶ日々は刺激的で、研究の奥深さ・難しさに没頭した2年間は、私の人生においてかけがえのないものであったと思います。ぜひ教育について疑問・関心を持つ多くのみなさんが、本専攻にて学ばれることを期待しています。

（研究テーマ「外国にルーツを持つ児童生徒等の母語･母文化への配慮―X 県における公立小学校教員への意識調査からみる現状と課題―」）

外池彩萌（令和3年度修了）筑波大学大学院人間総合科学学術院 人間総合科学研究群 教育学学位プログラム（後期）

私は教員養成系の教育学部を卒業後、本学大学院に進学しました。本学では、丁寧に指導してくださる教授陣が揃い、また貴重な資料が閲覧できる充実した環境のもと、多様な履歴をもつ者たちと同期となり、刺激的な毎日を過ごしました。私は、戦後日本の学校教育における平和教育の展開と課題の実証的解明から、これからの平和教育の手掛かりを得ようと研究を進めています。修士論文に取り組み、先輩や同期と議論し先生方からご指摘をいただき、研究と向き合うなかで、自分がもつ問いをより深く追求したいという思いが強まり、博士後期課程に進学しました。「理論と実践の往還」を大切にし、いずれ漢方薬のようにじわじわと効力を発揮する、息の長い研究をしたいと考えています。

（研究テーマ「戦後日本の学校教育における平和教育実践の展開―城丸章夫の平和教育論と雑誌『平和教育』分析を手掛かりに―」）

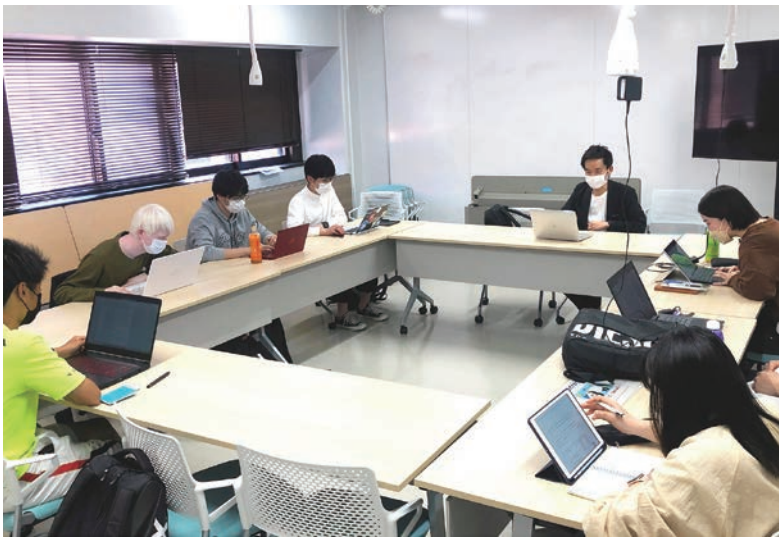
次世代学校教育創成サブプログラム 学校教育領域

英語教育分野

言語研究と教育研究を両輪とした英語教育の専門家に

English Language Education

*本分野は2020年4月より開設されました。



英語教育をめぐる課題や問題は、教育者はもちろん、世間一般の関心も非常に高いものです。本コースでは英語教育をより深く、正しく理解するために、英語教育に関わる理論や教授法などの専門的な知識・技能を身につけ、英語教育の今日的課題に取り組むことのできる人材の育成を目指します。

本分野の特色は、英語の習得や指導を学問的に考察する「英語教育学」を学びつつ、教育学や初等・中等の学校教育に関連する科目も履修することで、言語研究と教育研究を両輪とした英語教育の専門家の育成を目指す点にあります。本分野での学びを通じて、学校英語教育を理論と実践の両面から理解し、1つの見方や解釈に捕らわれずに多角的に英語教育を捉えることができるようになることを期待します。

カリキュラム

本分野では、以下のような科目の履修を通して英語教育に関する知識・理解を深めます。

『英語教育学習論』
第二言語・外国語の学習や運用、教授法に関する理論を学び、学校英語教育の実践について理論的に考えを深めることを目指す。

『英語教育内容論』
英語の音声や文字の特徴、評価論、異文化理解、英語学習と社会の関係など、英語教育に関連する専門的事項を様々な分野から幅広く学ぶ。

『英語教育実践論』
小学校、中学校、高等学校の英語教育における指導や教材、評価について理解を深め、学校現場での実践などを通して多様な場面に対応した指導技術を身に付ける。

『英語教育研究方法論』
英語教育研究の進め方として、先行研究の調査方法、英語教育に関するデータや文献の収集方法、統計解析などの方法論について理解を深める。

『初等英語特論』
小学校での外国語教育に対する理解を深めることを目的として、年少者の学びの特徴や指導方法、政策的な課題などについて理解・議論する。

これらの科目に加えて、教育学関連分野の科目の履修も行うことで、小学校から高校まで続く学校英語教育を広く、そして様々な角度から学ぶことが可能になります。

学生指導

入学して間もなく、指導教員と研究内容を相談することができます。もちろん、様々な授業を履修していく中で、自身のテーマを見つけていくことも可能です。学生は教員と近い距離で綿密な指導を受けることができると同時に、複数の学生が参加するゼミや研究会を通して研究内容を深めていくこともできます。1年次には研究の構想を完成させ、2年次では修士論文の進捗を発表する場が随時あります。

修了生の声

豊田眞考（令和3年度修了） 栃木県立那須清峰高等学校

大学時代に学んだ英語教育をより深く学びたいと思い、私は次世代学校教育創成サブプログラム学校教育領域の英語教育分野に入学しました。この分野では、英語教育についての最新の情報や研究成果に基づいた授業が行われており、授業を通して常に新しい知識や知見を得ることができたと感じています。また、指導教員の勧めもあり、在学中には関連学会や研究会へ参加し、英語教育の理論や実践に関してより理解を深めることもできました。私自身は研究者を目指して博士後期課程に進学するのか、それとも教職に就くのかを迷いながら、結果として教職に就くという進路選択をしましたが、本分野では博士後期課程に進学することもできますし、どの進路を選択しても役立つ学びが必ずあるはずです。

授業や研究を通して得た英語教育に関する専門的な知識と、様々な年齢や専門、職業の人々と共に学び、議論を繰り返した経験は、現在及び今後の授業実践において自己省察を行う際の重要な素地となっています。

次世代学校教育創成サブプログラム 学校教育領域

芸術科教育分野

芸術教育の理論と実践を先導する専門家の養成

Arts Education

芸術科教育分野では、新しい時代に対応する芸術教育の担い手として、高度な専門的能力と実践的能力を兼ね備えた人材の育成をめざしています。そのために教育全般に関する深い洞察力を身につけながら、一人一人の問題意識を高めていきます。また、芸術領域の専門的技能を習得していく多彩なカリキュラムを有しています。急速に変化する現代において、アカデミックな芸術の教養をふまえつつ、今日の新しいメディアや拡張する現代の芸術までを対象として、幅広く柔軟な視点から芸術教育の可能性を探究していくことを期待しています。

カリキュラム

芸術科教育分野のカリキュラムは、基礎科目、専門基礎科目、専門科目からなります。基礎科目は、「教育学理論研究」、「次世代教育開発研究」、「Theory of International Education」の計3単位が必修です。それらの科目では、次世代学校教育創成サブプログラムの院生全員がともに教科や領域・分野を超えて幅広く教育について考察していきます。専門基礎科目は、「芸術科教育特講a,b」「芸術科教育実践論演習a,b」「芸術鑑賞論a-1,2,b-1,2」の計8単位が必修で、芸術教育の基礎理論をふまえながら芸術教育における教材開発や実践課題を検討していきます。また、「学校心理学」「学校教育論」などの学校教育領域の科目（4単位以上）と他の学位プログラムからの科目などを含めて計10単位が選択必修です。各自の関心や研究テーマに応じてさまざまな専門分野からの授業を柔軟に選択することができます。例えば、芸術学学位プログラムには、美術史、芸術支援、洋画、版画、日本画、彫塑、書、構成、総合造形、工芸、ビジュアルデザイン、環境デザインなどの領域の科目があります。専門科目（9単位）は、「芸術科教育研究Ⅰ」を1年次で、「芸術科教育研究Ⅱ,Ⅲ」を2年次で履修し、各自の研究テーマに関わる知見や研究方法を検討しつつ探求を進め、修士論文を計画的に作成します。

学生指導

1年次から担任教員をおき、履修方法や生活面などさまざまな相談にきめ細かに対応できるようにしています。また、芸術科教育分野の学習室が用意されており、分野専用のパソコンや個別の学習机、コピーカード等が提供され、自習や研究のための環境が整えられています。

修士論文の指導では、研究テーマに応じて修士論文指導教員を決定し、定期的な研究指導を行います。そして、2年次において学校教育領域で修士論文の構想発表と中間発表を行い、論文審査を経て修士論文発表会を開催し、研究成果を公開します。

主な就職先

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教員 公立学校	0	0	1	1	0	0
教員 私立学校	0	0	0	0	0	0
官公庁	0	0	0	0	0	0
企業・団体	0	0	0	1	1	1
現職復帰	0	0	0	0	0	0
進学・留学	2	0	0	0	0	1

修了生の声

櫻井菜月 (令和3年度修了) かすみがうら市立千代田義務教育学校

学校教育領域の芸術科教育分野に入学し、修了研究では中学生が自己理解を促す自己像題材の実践に取り組みました。大学では制作を主としていたため、論理的に探究していくことは自身にとってほとんど初めての体験でした。しかし、研究論文・文献著書のレビュー方法やリサーチクエスチョンの明確化などを実践的に学べたことで、研究に向き合う地盤が作られました。また、研究室や他教科の仲間と芸術教育について議論・検証を行う中で、見識が広がりました。論文指導では、研究テーマの確定、調査の実施、データの分析方法などについて丁寧なご指導をいただきました。自身で見つけた研究課題に向かって学び続けることの深い喜びを実感できた、充実した2年間でした。

陸 依藍 (令和3年度修了) NTT東日本

次世代学校教育サブプログラム学校教育領域芸術科教育分野に入学し、「学習意欲を高める美術鑑賞教材に関する一考察―デジタルツールを活用した事例分析―」をテーマに、研究に取り組みました。学校教育におけるICT推進の政策と現状を考察しつつ、図画工作科でのデジタルツールの活用方法を提案しました。授業では、研究室や他教科の仲間と議論する中、教育学に対する理解を深め、自分の研究を振り返り、改善することができました。芸術学の博士後期課程に進むことができませんでしたが、修士課程の間に身につけたプレゼンテーション力や論理的思考力によって、通信会社への就職ができました。芸術科教育分野修士課程の2年間を有意義に過ごしたと考えています。

次世代学校教育創成サブプログラム 学校教育領域

保健体育教育分野

自ら力量を磨く創造的人材の育成

Health and Physical Education

保健体育教育分野では、保健体育科教育を学校教育全体の中で捉える視野を身につけ、保健体育教師として身に付けるべき実践的能力を、幅広い教育学的な素養とスポーツ科学の基礎的知識を踏まえて育成することを目指しています。

そのため、保健体育教師の職業イメージを形成するとともに、保健体育の授業づくりに関わる基礎的知識と実践的能力を育成する科目群を配置しています。また、筑波大学附属小・中・高校で行われる研究授業や教育実習に関わる実習を設定しています。

カリキュラム

保健体育教育分野のカリキュラムは、教員としての基本的な資質を養う「基礎科目」として３単位が必修、「専門基礎科目」として、保健体育科教育に関する科目を中心に、スポーツ科学に関する科目、各種運動・スポーツ指導に関する科目から18単位が選択必修となっています。保健体育科教育に関する科目にはカリキュラム、教材開発、授業づくりに関する講義だけでなく、模擬授業や授業の観察・分析法、教育実習に関わって学校現場で実践的に学ぶ実習・演習が設定されています。また、「専門科目」（9単位）として、修士論文の作成に向けて、各自の研究テーマに即して研究を進めていきます。このような学修を通して教育に関することはもちろん、スポーツ科学に関することについても学びを深めるとともに、学校と直接かかわって教育現場の今日的な課題に直接触れるなど、実践的に学ぶことができます。

学生指導

修士論文作成のための指導は、１年次から行われます。保健体育教育分野では、授業やゼミを通じて、学校教育、教科教育、保健体育科教育、各種運動・スポーツ種目と指導法、スポーツ科学について学びながら、学校における保健体育科教育に関する研究の構想をまとめていきます。授業観察・分析法を学び、教育現場での演習・実習の機会を活用して、予備調査や予備実験も行います。各運動・スポーツ種目を専門に研究する教員や、保健体育科教育学やその他のスポーツ科学を専門とする教員から指導を受けるだけでなく、小・中・高校の現職教員からもアドバイスを受けて、教育の実践現場に役立つ研究を立案・実施します。

テーマの選択や変更は自由で、原則として1年次の12月までにテーマを決定します。2年次に修士論文をまとめますが、修了までに研究成果を学会発表するよう促しています。また、例年1月末から2月初旬には、他大学の教員・学生、小・中・高校の現職教員等が集まる、体育系体育科教育学研究室の発表会があり、修士論文の研究成果を発表しています。

主な就職先

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教員 公立学校	1	1	4	2	0	1
教員 私立学校	0	0	0	0	0	0
官公庁	0	1	0	0	1	0
企業･団体	0	3	0	0	0	1
現職復帰	0	0	0	0	0	0
進学･留学	0	0	0	0	0	1

修了生の声

寺井翔太（令和4年度修了）長崎県庁

前職を退職後、もう一度教育について学び直したいと思い、保健体育教育分野に入学しました。カリキュラム上、教育学学位プログラムの授業はもちろんの事、体育学学位プログラムの授業も履修するため、教育、スポーツどちらの視点も養うことができることができることが、保健体育教育分野の魅力の一つだと思います。附属中・高との繋がりも強く、現場の先生方から学校現場の声を聞いたり、意見を交わす機会も多く設けられています。また、次世代学校教育創成サブプログラムには、現職の先生方も多くいらっしゃるため、教員という仕事をより身近に感じることができました。

授業の中では、保健体育の授業づくり、評価の仕方、制度等を含む様々なことを学ぶことができ、学群生の教育実習にも関わるため、学んだ知識を実践しながら定着させることができます。指導してくださる先生方は、学校現場での経験が豊富な先生も多く、研究を研究で終わらせることなく、実践的な学びを深めることができました。

野村千紘（令和3年度修了）石岡市立府中中学校教諭

私は体育専門学群から教育学学位プログラムに進学しました。その理由は、教員になるための勉強と経験を、新しい環境で積みたいと思ったからです。コロナ禍での2年間で活動が制限されてしまい、思うような活動ができないこともありましたが、修了して教職に就いた現在では、進学を決意して良かったと感じています。研究活動はもちろんのこと、臨床心理学の実践活動や、実際の教育現場の参観など、様々な経験が現在にも生きています。

また、私は学群4年で初めて教員採用試験を受験し、修士2年の3回目でようやく合格することができました。面接が課題だった私は、根拠を示して話すことが苦手でしたが、研究活動や人前で話をする機会を通して苦手を自信に変えることができました。

現在は中学校の保健体育教師として働いています。まだまだ慣れないことも多くありますが、大学院での経験が生きていると感じたことは1カ月でも数えきれないほどありました。今後も、学び続ける姿勢を大切にして、教職人生を送っていきたいと思います。

次世代学校教育創成サブプログラム

国語教育領域

人間性豊かな教育者をめざして

Japanese Language Education

国語科教員として、総合的な教育見識と高度な専門的能力とを備え、主として中等教育において指導的役割を果たすことができる研究的実践者の養成を目的としています。国語科という教科の性格上、単に日本語学・日本文学・漢文学・国語科教育学などの分野にとどまらず、広く言語教育を通して、生徒の人間形成の面においても優れた能力を持つ教員を育てます。国語科教員の「守備範囲」というものは実に広範です。教科書の教材だけに限ってみても、あらゆる内容のものが網羅されています。また、教科書教材以外での言語活動・コミュニケーション等を通して、随時、生徒に思考力・創造力・表現力等を養っていかなければなりません。それらにこたえられるような、豊かな人間性と実力とを具備した人材を育てていきます。

カリキュラム

中等教育全般にわたっての広い視野を修得できるように、カリキュラムは学術院共通専門基盤科目と専門基礎科目、専門科目から成り立っています。学術院共通専門基盤科目には、教育学理論研究、次世代教育開発研究、Theory of International Education等の多彩な科目が開設されており、教員として共通の基本的な資質が養われるようになっています。また、専門基礎科目としては国語科教育学・国語科教育史研究をはじめ、古典教育論・国語科リテラシー教育論・日本語学・日本文学・中国文学等の科目を開設し、国語教育全体をカバーするように工夫されています。

学生指導

1年次の夏休みあけまでに、各自の目ざしている研究課題についての概要を、一万字前後にまとめ、担任教員に提出します。それについて、コースの教員が相談の上、指導教員の割り振りを行い、以後、指導教員と連絡を密にとりつつ、指導を受けていくこととなります。研究の進捗の節目として、2年次の5月に修士論文構想発表会、10月に修士論文中間発表会があり、論文作成の進み具合を発表するとともに、全教員からの指導を受けるようになっており、きめ細かい配慮がなされています。

修了生の進路

修了生の大部分は、全国の公・私立の小・中・高等学校に、国語科の教員として就職しています。その他、国立、私立の大学、短大、国立高等専門学校、附属学校等の教員になっている例も多くなっています。

また、文部科学省の教科書調査官として教育行政の面で活躍する者もいれば、自分の研究をさらに積み上げるべく博士後期課程に進学する例もあります。いずれも日本の国語教育を支える様々な分野の研究・教育面において、それぞれ枢要な位置で活躍しています。

主な就職先

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教員 公立学校	6	5	10	1	1	1
教員 私立学校	1	1	3	1	2	1
官公庁	0	0	0	1	0	0
企業・団体	0	0	0	0	0	0
現職復帰	1	0	1	0	1	0
進学・留学	0	0	0	1	0	0

修了生の声

小野寺亜希子（2022年度修了）東京都立八王子東高等学校 国語科教諭

私は国語科教師として、生徒の率直な意見を引き出し、より主体的に学べる場を作りたいという思いを胸に、長期派遣研修制度を通じて進学しました。一年次は、授業を通して先生方の最新のご研究に触れたり、他領域の学生と海外の研究について議論したりと、新たな視点から問題を考察する眼を養いました。また、漢籍を読み、関連した文献を調査したり、仲間と議論したりする授業では、読み解くうちに自身の視野がだんだんと広がっていくことを実感できました。そのときの嬉しい気持ちは今でも忘れられません。これらの経験は、現職に戻った今、私の授業づくりを変えてくれました。二年次は現職に戻り、研究を進めました。仕事と研究の両立は、時に困難なこともありましたが、いつでも先生方が手を差し伸べてくださいました。ある先生は、「もっと未来を見て、生徒に何ができるかを考えなさい」と励ましてくださいました。国語教育領域は、先生方や仲間に支えられながら、自分の来し方を顧み、そこから広い視野に立って教育を科学的に見つめる、自分なりに未来の教育に繋がる一端を探すことができる場だと思います。

古谷梨菜（2022年度修了）茨城県立波崎高等学校

「研究のできる実践家になりたい」という思いで、次世代学校教育創成サブプログラム国語教育領域に進学しました。修士論文では、「外国にルーツをもつ子どもたちの国語科教育」というテーマで研究に取り組みました。大学では、国語科教育を専門としていなかったため、不安もありましたが、熱心にご指導くださる先生方、志を同じくした院生、研究を応援してくれる卒業生のおかげで、最後まで自分がやりたいと思う研究を貫くことができました。

卒業し、教員として働き始めた今、大学院の２年間を振り返ると、国語教育領域は「研究のできる実践家になりたい」という私の思いを叶えるために幸せな環境であったと感じます。加えて、国語教育領域で学んだことは国語科の教員としての財産であると思います。

国語科教育に熱意を持って取り組みたいと考えている方が一人でも多く、国語教育領域に進学し、私たちの仲間となってくださることをお祈りしております。

次世代学校教育創成サブプログラム

社会科教育領域

学問的背景を持った優れた教育者の育成

Social Studies Education

社会科教育領域では、高度な学問的背景を持った優れた高等学校教師および中学校教師の育成を目指しています。昨今、全国の教育系大学に大学院が設置されつつありますが、高等学校の教員を養成しようとしている大学院は数えるほどしかありません。その中にあって、本学大学院教育学学位プログラムの社会科教育領域は定員でも全国有数の規模を誇り、毎年多くの修了生を全国に送り込んでいます。中・高等学校の教師を目指す上で、自分の専門分野の学問を深めることはもちろん重要ですが、本領域ではそれに加えて授業論を中心とする教育学的研究も重視しています。修士論文ではかなり広範な問題を扱うことができ、社会科・地理歴史科・公民科のいずれの教科の内容にも対応できる態勢を有しています。

カリキュラム

社会科教育コースの専門科目では、次の科目のうち6単位が必修です。

・社会科教育学内容論（地理歴史）（3単位）
・社会科教育学内容論（公民）（3単位）
・社会科教育学実践論（地理歴史）（3単位）
・社会科教育学実践論（公民）（3単位）

これらの授業をはじめ大学院の授業では、自由なテーマで研究した内容を報告しながら、社会科教育についての基本的な考え方を深めていきます。1年次にはグループに関係なく多くの授業を履修できます。各自の専門を深めながら、2年次には修士論文の内容により、地理・歴史・公民の三つのグループに別れ、修論指導を受けることになっています。

学生指導

1年次においては2月に修士論文のデザイン発表会を開催し、論文の趣旨と構成を発表させています。2年次に入ると、論文の内容によって地理・歴史・公民のいずれかの演習に属し、複数の教員が指導を行ないます。また2年次の10月には修士論文の中間発表会を開き、社会科教育領域教員全員がそれぞれの視点から指導を行ないます。1月に最終審査を教員全員で行ない、合格した者に対しても研究をさらに発展させるための指導がなされます。

修了生の進路

院生のほとんどが高等学校の教員を志望しており、ほぼ全員が教員採用試験に合格して教職に就いています。中には1年程度足踏みするケースもありますが、その場合でも非常勤講師などを経て多くが正式に就職しています。近年児童・生徒の減少に伴い、採用試験の難易度が増す傾向にありますが、出版社やマスコミ関係、公務員への進路も開かれており、教育学的教養を生かした職を得ています。さらに、筑波大学大学院博士後期課程その他の大学院に進学して、研究者になる道も豊かに開かれています。

主な就職先

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教員 公立学校	17	6	11	9	4	9
教員 私立学校	1	4	3	2	1	0
官公庁	0	1	0	1	0	1
企業・団体	1	4	3	1	0	0
現職復帰	0	0	0	2	0	0
進学・留学	0	1	0	2	0	0

修了生の声

髙橋 誠聖（2023年度修了）群馬県高等学校教員

私は、この大学院で多くの貴重な経験をすることができました。学類時代は歴史学に没頭するばかりでしたが、大学院では社会科教育や歴史学、教育学など、様々な専門領域にアクセスし、閉じこもっていた視野が広がりました。特に歴史教育ゼミの巡検や実習では、自らの足を使って多くの場所を訪れ、目で見て肌で感じることの重要性を体感できました。こうした貴重な経験により、実際に教壇に立ってみて、教科書に限定されない様々な視点から歴史を捉えるという学習指導を目指すことができています。こうした経験を重ねられることは、社会科教育領域の強みだと感じています。そして何より、大学院では研究に関わらず親身に相談に乗ってくださる先生方や、互いに刺激し合える仲間に出会うことができます。ここで得た経験や出会いは、今後の教員生活の様々な場面で自分の支えになると確信しています。

次世代学校教育創成サブプログラム

数学教育領域

数学教育を担い先導する人材の育成

Mathematics Education

新しい知識・情報・技術によるイノベーションが新産業を生み、旧産業の革新が迫られる変動社会を迎えました。第4次産業革命、Society 5.0の進展が課せられた今日では、AI, Big Dataなどを活用してデザインしえる未来を探る科学、数理資本主義ともいわれる未来社会を実現する科学として数学はますますその重要性を高めています。今日の教育界における最重要課題の一つは、その変動社会・数理基盤社会の創成を担う「自ら学び自ら考える」ことのできる人材の養成です。数学教育領域では、この社会的要請に応えるべく数学と数学教育をともに学ぶ教育体制のもと、数学教育を担う中核人材に相応しい資質・能力を養い、数学教育学における実践的研究者を養成することを目指しています。

カリキュラム

カリキュラムは、基礎科目・専門基礎科目・専門科目から成っています。基礎科目は、教育学理論研究、次世代教育開発研究、Theory of International Educationを必修として、学術院共通専門基盤科目のうち、教育学に関するものを履修します。専門基礎科目では、数学教育学の基礎的な諸理論・授業分析・教育史に関する科目および数学に関する科目を履修し、数学教育学及び数学のより深い理解を目指します。この他、別の学位プログラムの科目も履修することができます。専門科目は、数学教育学研究I、II、IIIからなり、修士論文作成指導を行います。教員免許状は、中学校、高等学校の数学の専修免許状を取得でき、初等教育関連の科目を履修すれば小学校の専修免許状を取得することもできます。

学生指導

数学教育領域では数学および数学教育学における高い素養を備えた教育者・教育学研究者・教育行政官を養成することを目指します。学生は数学教育学あるいは数学を主専攻として選び、指導教員のもとで修士論文を作成します。

修了生の進路

前身の修士課程教育研究科の時代から、多くが中学校・高等学校の数学科教員として勤務しています。博士課程への進学等を経て、また実践研究者としての研鑽を経て、大学の数学教育研究者や数学者、文部科学省の視学官・教科調査官、その他の国立機関、教育委員会等の数学教育担当者も輩出してきました。国家・地方公務員総合職、教育系出版社などへの就職例もあります。

主な就職先

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教員 公立学校	10	1	5	2	3	1
教員 私立学校	2	3	2	0	1	1
官公庁	0	1	0	0	0	0
企業・団体	1	0	3	1	0	3
現職復帰	0	1	0	2	0	0
進学・留学	0	0	1	1	0	3

修了生の声

佐々木知哉 **（令和3年度修了）北海道教育庁檜山教育局 指導主事**

高校数学教師としてこれまで実践してきた授業を、確かな指導理論に基づいて見つめ直し、教師としての質をより高めたいという思いから、現職の大学院派遣制度を利用させていただき進学しました。数学教育領域では、数学教育の立場で世界を牽引される先生方から、理論と実践の両面で多くの学びを得ることができます。さらに、我々院生の問題意識から設定する研究テーマに応じて、親身なご指導をいただくことができます。また、全国各地の大学から進学してくる方々や現職派遣の先生方と共に、日々数学教育に関する議論を交わし、互いに高めあう文化があります。ここで学ぶ２年間によって身に付く数学教育を俯瞰する“視点”は、教育現場で実践する数学教育に必ず結びつきます。一度得た学びは一生の財産となりますので、是非、この学びの環境において出会う仲間と実りある日々をお過ごしください。

次世代学校教育創成サブプログラム

理科教育領域

中等理科教育界のリーダー養成

Science Education

理科教育領域は中等教育段階でリーダーシップのとれる理科教師の育成を主たる目標にしています。院生は、思春期の生徒の実態をふまえた科学教育の知的素養と科学各分野（物理、化学、生物、地学）の幅広くかつ専門的な知的素養の両者を統合的に修得しながら、中等教育段階の科学教育や科学各専門分野での課題をテーマに修士論文を作成し、修士（教育学）および高校・中学校理科教員の専修免許を取得して、将来の日本の中核的な人材になることを目指して巣立っています。

カリキュラム

理科教育領域では、理科教育の基礎的・基本的な知識の修得を目指す科目、および、中等学校の理科教師に必要な科学の各分野（物理、化学、生物、地学）の知識や実験指導等の技能の修得を目指す科目が、専門基礎科目として開講されています。これらは、講義、演習、実験・実習などの形態で実施されます。特に基盤となる科目は必修科目に指定されています。この他に、理科教育や科学各分野のより深い理解を目指し、研究や修士論文作成、研究発表を行う専門科目が開講されています。この専門科目は必修科目であり、各自研究室に所属して研究を行い、構想発表（1年次）、中間発表（2年次）、修論発表（2年次）の3回の研究発表と、修士論文の提出が求められています。

学生指導

1年次にクラス担任を配置し、研究室配属前の学生に修学・学生生活上の指導を随時行っています。修士論文のテーマは、理科教育学の分野、科学の各専門分野、教材開発などから自由に選択することが出来ますが、遅くとも1年次の8月までに指導教員とテーマを決めます。テーマが決まった時点から研究に着手し、3月に構想発表を行って領域担当教員からの指導を受けます。2年次では10月に中間発表を行い、理科教育領域の審査に合格した者が、修士論文の提出を認められます。最終審査会は2月に行われます。

修了生の進路

これまでの修了生の大部分は、主に全国の中学校・高等学校の理科教師となっています。この他、理科教育学や科学の各分野の大学院に進学したり、大学の理科教育学や他の領域の教員になっています。さらに民間企業に就いたものもいます。また、現職派遣教員や海外からの留学生も現職復帰したり、母国に戻っています。それぞれが皆リーダーとなって活躍しています。

主な就職先

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教員 公立学校	10	5	7	11	0	5
教員 私立学校	2	2	4	2	2	2
官公庁	0	0	0	0	0	0
企業・団体	1	2	2	3	0	1
現職復帰	0	0	0	1	0	1
進学・留学	0	1	0	1	0	0

修了生の声

安藤友恵（令和3年度修了）明法中学・高等学校　教諭

大学で教育学を専攻していた私は、教員として働く前に教科に関する専門性をより深めたいと考え、大学院に進学しました。大学院では多くの先生方や、現職経験を有する方、そして理科教育を学びたいと入学した同期と出会うことができ、互いに議論したり、時には助け合いながら学びました。大学院でこのような素晴らしい方々と出会えたことを、本当に嬉しく思います。

私たちは、コロナ禍にてオンライン授業を余儀なくされた代ではありましたが、オンライン上でも議論をしたり、実験活動ができるよう、先生方が非常に多くの工夫をしてくださいました。講義だけでなく、実験や実習を通して知識を深めることができました。また、研究室で行った修士論文執筆など、大学院での2年間における全ての経験が、教員生活の様々な場面で活かされています。

登坂健志（旧組織：教育研究科 教科教育専攻 理科教育コース）（平成30年度修了）群馬県立渋川女子高等学校　教諭

大学で学んだ化学の知識に加え、教育に関する専門性も有する教員になりたいと考え、大学院に進学しました。大学院では、教育学や各科学分野の幅広い講義に加え、実験や実習活動も充実しており、理論と実践の双方から学ぶことができました。様々な専門分野の先生方や、同じように教師を志す同期、現職経験を有する方と学び合える環境は、教師としての資質を磨くのに最適であったと感じます。

また研究室では、先生方の手厚いご指導の下、日々の研究活動に取り組むことができました。研究テーマの選定、ゼミでの議論、学会への参加、そして修士論文執筆と、教育について日夜考えた時間は私にとって大きな財産です。研究室での活動を通じ、自身の研究を深めるとともに、どのように学び、究めるかという、「学びの作法、姿勢」も学びました。大学院で過ごした2年間の経験は、今後の教員生活での成長の礎になると信じています。

サブプログラムの紹介

教育基礎科学サブプログラム

博士前期課程　博士後期課程

- 国際教育サブプログラム
- 次世代学校教育創成サブプログラム
- 教育基礎科学サブプログラム

国内外の大学や研究機関等において教育学諸分野の教育・研究に従事し、各分野の研究を牽引する研究者を養成することを目的に掲げています。教育学の幅広い高度な知識と能力を修得するとともに、教育学の理論と実践とを統合したカリキュラムと教授法の下で、教育の本質と現実的課題を問い続ける研究姿勢と基本的な研究方法、時代の要請に応える実践力を身につけた教育学研究者の育成を目指します。

3つの教育目標

教育の本質論を核として展開した教育学を体系的に理解すること

教育の現実的課題を探求する方法論を修得すること

主たる専門分野の開設科目を履修することにより、専門分野に関する知見を深め、併せて、関連する専門分野に関する理解を深めること

教育基礎科学サブプログラム

教育学諸分野の教育・研究を牽引する研究者を養成

*本サブプログラムは2020年4月より開設されました。(旧人間総合科学研究科博士前期課程教育学専攻)

多様化・複雑化する教育的課題

意図的・計画的営みとしての教育は、乳幼児教育から青少年教育、成人教育、高齢者教育まで多様な形態をとり、かつ、家庭、学校をはじめとする教育機関、地域社会、地方自治体、国、国際社会等のさまざまなレベルで多層的に展開されています。また今日、人工知能等の技術革新の進展や、様々な領域で進行するグローバル化などを典型とする社会的な変化により、私たちの生活そのものがかつてない程度と速度で変容を遂げています。このような中で、多様化・複雑化する現実の教育諸問題や現代社会が求める広範な教育的課題を、教育の理論と実践の両側面から多角的かつ科学的にとらえ、社会に貢献できる実践力や研究能力を有する人材が求められています。

筑波大学の教育学

教育基礎科学サブプログラムでは、教育学の幅広い高度な知識と能力を修得するとともに、教育学の理論と実践とを統合したカリキュラムと教授法の下で、教育の本質と現実的課題を問い続ける研究姿勢と基本的な研究方法、時代の要請に応える実践力を身につけた教育学研究者の育成を目指します。そのために、教育哲学、日本教育史、生涯学習・社会教育学、教育制度学、比較・国際教育学、学校経営学、教育社会学、高等教育論、教育方法学、カリキュラム学、道徳教育学、キャリア教育学、特別活動学、社会科教育学、人文科教育学、数学教育学、理科教育学、外国語教育学などの多彩な研究分野の教員が、複合的な視点から教育学研究者として必要な知識と能力を高めるための指導と助言をします。

目指すべき教育目標

本サブプログラムでは、教育学研究を進めていく基礎を養い、修士号を取得するために、次の目標を掲げています。

目標１．教育の本質論を核として展開した教育学を体系的に理解すること。

目標２．教育の現実的課題を探求する方法論を修得すること。

目標３．主たる専門分野の開設科目を履修することにより、専門分野に関する知見を深め、併せて、関連する専門分野に関する理解を深めること。

充実した指導体制

研究者や院生間の知見を交流するために、研究分野や研究コース内での研究会やゼミの枠を広げて、学際化しつつある研究者や院生の研究需要に応えられる指導体制を構築しています。また研究指導は、所属する研究室の研究会・ゼミ等だけでなく、関連する研究分野の研究者や院生が自由に参加することのできる体制を整えるなどの工夫を凝らしています。

また、修士号取得のために、研究指導体制の特色を生かしつつ、第2学年の5月と9月に中間指導会を実施して、院生の論文作成へのしっかりとしたサポートを提供しています。

修了後の進路

ほとんどは博士後期課程に進学しますが、本学他専攻や他大学の大学院進学者や中高の教員、公務員、一般企業なども増えています。

(論文指導会の様子)

(入学式当日の新入生オリエンテーションの様子)

サブプログラムの紹介

教育学学位プログラム（後期）

博士前期課程　博士後期課程

- 国際教育サブプログラム
- 次世代学校教育創成サブプログラム
- 教育基礎科学サブプログラム

教育学学位プログラム（後期）は、教育の本質を解き明かし、現代の教育課題を考究し、教育学研究をより一層深化させるためのプログラムです。日本の教育学の学統に新しい学風を常に取り入れるといった、伝統と改新の両方を合わせもった教育学を築きあげていく研究を養成します。現代社会において、教育のありようは地球規模の多様で複雑な要因によって規定されており、我々が直面する教育課題を的確に把握して解決することは容易ではありません。本学位プログラムは教育学を構成する多くの専門分野から成り、それぞれの専門性を尊重しつつ、協働的な体制の下で、現代の教育課題に対峙できる研究者を育成し、博士論文の指導を行います。

後期課程の教育目標

社会の急激な変化のもと対応を迫られる教育の具体的課題
地球的視野をもって解決されるべき教育の本質的課題
それぞれについて

教育学の幅広い学問的知見を基盤として
的確な研究方法をもって追究し
独創的な研究成果を国内外に向けて発信し

政策と実践の改革を国際的に先導することのできる
教育学研究者ならびに高度専門職業人を
養成することを目的とします

教育学学位プログラム（後期）

全国に多数の教育学研究者を輩出してきた伝統を受け継ぐ

*本学位プログラムは2020年4月より開設されました。(旧人間総合科学研究科博士後期課程　教育基礎学専攻・学校教育学専攻)

教育的課題へのアプローチ

日本では、明治期以来の社会の発展を支えてきた学校教育が正統性を揺るがされ、その在り方の再考が求められています。高度情報化社会の到来、様々な領域での国際化・グローバル化の要請、少子高齢化の急速な進行、生涯学習社会への移行と高学歴化のさらなる進行、「政府の失敗」「市場の失敗」を踏まえたガバナンスの再構築など、これまで形成されてきた教育をめぐる価値観や基本的前提が大きく揺らいでいます。

未来社会に向けて、学校をはじめとする教育をどう再構築していくべきなのか、私たちは理論と実践の両面から追究していかなければなりません。

筑波大学の教育学

師範学校以来の本学の前身校の展開は、公教育の発展と歩みをともにし、「教育の総本山」とも称されてきました。本学位プログラムでは、近代教育の展開とともに発展した日本の教育学の学統を引き継ぎ、そこに新しい学風を常に取り入れるといった、伝統と改新の両方を合わせもった教育学を築きあげていく研究者を養成します。そして教育学の幅広い学問的知見を基盤として、的確な研究方法をもって追究し、独創的な研究成果を国内外に向けて発信し、政策と実践の改革を国際的に先導することのできる教育学研究者ならびに高度専門職業人を養成することを目的とします。

充実した指導体制

本学位プログラムの大学院生は専門分野の研究室に所属しますが、指導教員以外の教授陣から指導助言を受けられる柔軟な指導体制をとっています。また、海外の大学との交流に学生を派遣する事業や、全国の大学や研究機関等で活躍する多くの先輩諸氏と研究交流できることも本学位プログラムの大きな強みです。

（ハイブリット型国際学生カンファレンスの様子）

近年の主な学位論文題目

移民の子どもたちにとって社会科教育が持つ意義に関する研究－学びの意味づけとその要因を探る質的調査をもとに－（社会科教育学、2023）

障害の問題への「当事者性」を獲得する学びと運動の展開－日英の教育改革を事例として－（生涯学習・社会教育学、2023）

アメリカ社会科におけるインクルージョンの理念と方略－社会正義の視点から－（社会科教育学、2022）

数学的探究における定義活動の促進に関する研究－課題設計原理の生成に焦点を当てて－（数学教育学、2022）

国際教育協力における理科の探究授業についての授業研究プログラムの構築と実践－東南アジアにおけるフィールド調査に基づいて－（理科教育学、2021）

アメリカ合衆国における子どものエンパワメントを重視した市民性教育の理論と方法－シカゴにおける取り組みを事例として－（社会科教育学、2021）

中国語文科におけるジャンルの研究－機能の観点からみた文章表現指導の検討－（人文科教育学、2020）

旧制中学校国語科における文法教育の課題－作文教育との関連に着目して－（人文科教育学、2020）

海軍飛行予科練習生の教育史的研究－軍関係教育機関としての制度的位置とその戦後的問題－（日本教育史、2019）

1970年代以降のドイツにおける改革教育的な学校改革と授業実践－学校と生活の接続問題をめぐる授業の構成理論－（教育方法学、2019）

ゴーチエにおける芸術教育思想の特質－人間形成論的側面に着目して－（道徳教育学、2019）

現代アメリカの貧困地域における市民性教育改革の研究－教室・学校・地域の連関構造の重要性に着目して－（学校経営学、2018）

修了後の進路

文部科学省、国立教育政策研究所、および日本全国の国公立大学、私立大学、高等専門学校など。

（2023 年度修了式の様子）

社会人の受入れ

科学技術の進歩や社会の複雑高度化に伴い、大学院における社会人の再教育の要請が著しく、法的にもその対応が図られています。教育学学位プログラムにおいても、在職のまま大学院の教育を受け、教育研究及び実践上の指導的役割を果たし得る学識と能力を培うことができます。本学位プログラムでは、有職者のための特別な履修条件を設定するなどして、これまでに多くの有職者を積極的に受け入れてきており、修了した多くの有望な社会人が職場で活躍しています。

入学試験についても、一般の入試とは異なる「社会人特別選抜」を国際教育サブプログラム及び次世代学校教育創成サブプログラムにおいて設定しており、書類審査と小論文・口述試験のみで受験することができます(注)。また、現職教員を対象として、修了年限を原則として1年間とする「現職教員1年制プログラム」も配置しています。

現職教員は一般入試、社会人特別選抜、現職教員1年制プログラムのいずれでも受験できます。詳細は学生募集要項を参照して下さい。

(注)ただし、国際教育サブプログラムの社会人特別選抜においては、小論文と口述試験に加えて外国語の試験が課せられます。

現職教員1年制プログラムの概要

※次世代学校教育創成サブプログラムのみ

1. 現職教員1年制プログラムの特色

現職教員1年制プログラムは、大学院修学休業制度あるいは教育委員会派遣等による研修制度を活用して、短期間の集中的学習で修士号並びに専修免許状の取得を可能にすることを目的に設けられたプログラムで、次のような特色をもっています。①1年間での修了を原則とすること、②教育実践あるいは実践的な研究において既に実績をもつ現職教員を対象とすること、③修了要件として、修士論文もしくは特定課題研究成果報告書の審査を必要とすること、④修士(教育学)の学位が授与されること、⑤専修免許状が取得できること。

次世代学校教育創成サブプログラムの母体の教育研究科には、すでに30年以上に及ぶ高度専門職業人養成の実績があります。本プログラムにおいても、問題意識を有する現職教員を、その意欲や主体性に応じて集約的、選択的に教育することに努めています。

2. 現職教員1年制プログラムの指導体制

(1) 履修スケジュール

本プログラムの入学後の履修については、次のような流れになっています。

入学後、研究テーマと単位取得計画に沿って単位履修申請を行い、修了要件である30単位の履修を進めます。この際、入学前に大学院の科目等履修生等として取得した単位は、所定の手続きを経れば、10単位を上限として認定されます。修士論文あるいは実践研究報告書については、中間的な発表等を行い、研究の進捗状況を報告し、教員からの指導を受けます。翌年1月には、修士論文あるいは実践研究報告書を提出した後、学位論文（実践研究報告書）の査読及び最終試験があります。

本プログラムの修了生については、修士論文あるいは実践研究報告書の区別なく、学位としては修士（教育学）が授与されます。また、当該単位を履修すれば、専修免許状を取得することができます。

(2) カリキュラム上の配慮・工夫

次世代学校教育創成サブプログラムでは、数多くの専門的な授業が開設されています。これらの授業を履修することによって、各自の研究課題についてさらに知識を広め、また深められるとともに、関連領域の授業から、研究課題を幅広く捉え直すこともできます。

(3) 修士論文（実践研究報告書）の指導体制

次世代学校教育創成サブプログラムには、学術的または実践的な研究指導を行う教員が配置されており、幅広い立場からの研究指導が可能です。修士論文や実践研究報告書の指導においては、高度専門職業人へのリカレント教育という観点から研究指導を行います。このような指導体制の下、現職教員は自らが蓄積してきた経験を生かし、研究課題に関する考察を深めることができます。

社会人特別選抜学生年度別入学状況

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
博士前期課程	11	8	14	18	12	11	11	11	11	9	9	18	18
国際教育 SP(教育研究科 教育学(国際教育)修士プログラム)	-	-	-	-	-	3	4	2	3	3	2	3	7
次世代学校教育創成 SP	11	8	14	18	12	8	7	9	8	6	7	7	11
学校教育領域													
スクールリーダーシップ開発分野(教育研究科 スクールリーダーシップ開発専攻)	8	3	5	4	6	4	4	4	2	4	4	2	4
英語教育分野(教育研究科 教科教育専攻 英語教育コース)	1	0	4	4	1	0	0	1	0	0	2	2	0
芸術科教育分野(教育研究科 教科教育専攻 芸術科教育コース)	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
保健体育教育分野(教育研究科 教科教育専攻 保健体育教育コース)	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0
国語教育領域(教育研究科 教科教育専攻 国語教育コース)	0	2	2	3	2	1	0	1	1	1	0	2	1
社会科教育領域(教育研究科 教科教育専攻 社会科教育コース)	0	2	0	2	1	0	0	0	2	0	0	0	5
数学教育領域(教育研究科 教科教育専攻 数学教育コース)	0	0	1	1	0	2	1	1	3	0	0	1	0
理科教育領域(教育研究科 教科教育専攻 理科教育コース)	1	0	1	2	1	1	2	2	0	0	1	0	1
教育基礎科学 SP(博士前期課程 教育学専攻)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
博士後期課程(博士後期課程　教育基礎学専攻、学校教育学専攻)	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	8	8	5

注）1．（　）内は対応する旧組織の名称。2019年度以前の数字は、旧組織におけるデータである。
　　2．博士後期課程については、2020年度2月期入試より社会人特別選抜枠が設定された。

『二足のわらじの会』プロフィール

現職教員として教育研究科（現組織:次世代学校教育創成SP）に在籍している人たちによって昭和57年につくられ、交流が続けられています。

二足のわらじの会 会長

櫻井 大介（次世代学校教育創成SP／学校教育領域／スクールリーダーシップ開発分野）
静岡県立天竜高等学校

本会は、教員と学生という「二足のわらじ」を履き教育研究科（当時）で学ぶ者の集まりとして発足したことをその名の由来としています。発足は昭和57年ですので、42年目を迎える歴史のある会です。各都道県からの派遣、休職制度の活用などによって在籍する方々を中心として、これまで多くの現職教員のみなさんが校種を超えて在籍してきました。また、本会を母体として、平成６年には当時の高等学校の教員が中心となり日本高校教育学会も設立されました。この学会は、国内唯一の高校教育を研究対象とした学会として、日本の高校教育の改善・充実と高校教師の力量向上に貢献する存在となっています。

本会の目的は、多様な教職経験を持った方々が、校種や教科、専門、地域の枠を超えて情報交換をすることで、各自の研究内容をより深化させ、高度専門職業人としての見識を深める機会を提供することにあります。具体的な活動としては、大学院の先生方をお招きしての勉強会、教員を志望するストレートマスターとの交流会などを行っています。教育現場の生の情報について大学院の先生方やストレートマスターと意見交換ができる貴重な交流の場となっています。また、本会での交流を通じて、現代の教育現場が抱える苦悩や問題点、あるべき理想についても語り合う事が出来ます。現職教員同士、お互いの研究について腹を割って話すことができる人間関係を築けることは、大学院での生活をより一層実り多きものにしてくれます。

現在の「二足のわらじの会」は「二足のわらじ」にこだわらず、退職されたベテラン教員の方や教育実践を経験された方、さらには教員ではなく民間企業での勤務経験がある方なども加わり、多様な経歴を持った方々が多数参加する会となっております。一度社会に出てから再び学生生活を始めるということは、大きな期待に胸を膨らませる一方で、不安も伴います。本会はそんな社会人経験者の心の拠り所という貴重な場にもなっています。

対面で勉強会や懇親会を実施することができ、「二足のわらじの会」のみなさんと繋がることができたときは、大きな安心と心強さを感じることができました。先輩方からは授業や学校生活における貴重な情報を教えていただき、同級生とは自分と同じような苦労や不安を抱えていることを共有し、自分一人ではないということが励みになりました。

本会で得られる様々な人とのつながりは、大学院での生活においてかけがえのないものとなると思います。研究以外でも、学校生活や私生活に不安や心細さを感じた時など、「二足のわらじの会」が少しでもお役に立てればと思います。

牧之段 拓（次世代学校教育創成SP／数学教育領域）
つくば市立学園の森義務教育学校

これまでの教員生活の中で、目の前の子どもたちと向き合い、教育実践を日々積み重ねてきました。この数年の間に学校や教員、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化しました。AIをはじめとする技術の発達は、世界を複雑で予測困難な時代へと誘い、子どもたちに備えさせたい資質・能力は大きく変容し、付随するように教員に求められる力も変わりました。時代背景に即した教育を提供するためには、教員自身がアップデートしていく必要があります。教員として多くの経験を積む中で、経験知は蓄積されていく一方、理論知の不足を感じていました。様々な講義を通して教授される知識は多くの刺激を与えてくれるとともに、これまでの教育実践の答え合わせとなり、背中を押してくれるものとなっています。また、領域を越えた多くの院生との交流は新たな視点をもたらしてくれました。そして「二足のわらじの会」で出会えた同じ立場の現職教員や社会人経験の方々との縁は何物にも代え難いものになりました。悩みを共有したり、教育について語り合ったりできる場は心強い存在です。今後も「二足のわらじの会」で得た縁を大切に、少しでも教育に貢献、還元できる研究を続けていきたいと思います。

大野 麻未（次世代学校教育創成SP／学校教育領域／英語教育分野）

高等学校の教員として働く中で、より専門性を高めたいと考え、大学院への進学を決めました。特に、ここ数年、急速な社会変化を受け英語力のさらなる向上が指標として掲げられる中、英語科教員として何ができるのか、何をすればよいのかと迷うことが多くありました。何かしなければならないと思う一方、様々な業務や生徒対応に追われる日々。なぜこうした問題や課題が生じているのか、どのような支援をしていけばよいのか、といったことを深く考えたり、自己研鑽のために研究会へ参加したりする余裕がない状態でした。大学院での生活を通して自分にとって一番価値があると感じるものは、様々な背景をもつ人たちとの交流の中で、自分の行ってきた実践を振り返り、これから何をしていきたいのかを考える時間をもてたことです。

授業では理論などについて知見を広げるだけでなく、幅広い観点から現状を捉え直し、これからの教育について考えるとともに、若い学生の率直な意見を聞くことで、以前とは違う視点を得るなど、大学院ならではの学びが多くありました。

こうした中、「二足のわらじの会」では、志を同じとする現職教員の皆さんと、勤務地や校種などの違いを超え、「教育」とは何かといった本質や理想について語り合い、教師という仕事に対する思いを振り返る機会をいただき、感謝しています。今後も、この会で頂いたつながりを深めていきたいと思います。

間口 ゆみ（国際教育SP）元JICA数学教育専門家

私は、日本国内外の小学校・中学校で教員として勤務した後、JICA（国際協力機構）技術協力プロジェクト専門家としてザンビア、エチオピアで教材開発や教師教育の支援に携わりました。外国につながる子どもたちや様々な困難を抱える子どもたちとの関わりを通して、途上国での国際協力実施者として、子ども同士、教員と生徒、教員同士、援助国と被援助国、皆が互いに学び合うとはどのような状態か、真の学びとは何かをいつも考え、私自身はそれを体現できているのだろうかと自問自答していました。

大学院入学後は、ストレートマスター、現職教員、社会人、留学生など多様な仲間との出会いやディスカッションを通して、彼らの多様な経験から学んでいます。そして、研究を通して自らの考えを言語化し、深めていく面白さを味わい、今、まさに学びの体現者であることを実感しています。私は現職教員ではないものの、「二足のわらじの会」に参加することで、社会人入学の皆さんと専攻分野をこえて知り合い、授業や研究のことを気軽に相談することができてとても心強いです。今後も、本会を通じてたくさんの出会いがあることを楽しみにしています。

留学生の受入れ

外国人留学生

教育学学位プログラムには、一般入試や社会人特別選抜を経て入学した様々な国からの外国人留学生が籍をおいています。外国人留学生には、入学試験において外国語で回答できたり、履修において英語の授業が開講される等の便宜が図られています。教育学学位プログラムの学生は、外国人教員研修留学生を含め、授業や様々な行事等を通して留学生と交流する機会が多く、またチューターとして親しく接する機会も与えられます。「国際理解」の実際に立ち会う貴重な経験ができることでしょう。

外国人教員研修留学生

教育学学位プログラム（旧教育研究科）では、昭和55（1980）年10月から外国人教員研修留学生の受け入れを開始しました。外国人教員研修留学生は、現職の初等・中等学校教員および教育関係機関の専門職員等であり、その出身国は、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南米など多岐にわたっています。これまでの受け入れ総数は、2024年６月現在で54ヶ国・396名にのぼります。外国人教員研修留学生プログラムを通じて、日本の教育及び社会に対する理解を促進するとともに、学生や教員等との交流を深め、国際親善に寄与することを目的としています。

外国人教員研修留学生の研修期間は10月から翌々年3月までの1年半であり、独自のプログラムが設定されています。最初の半年（10月～翌年3月）は本学留学生センターにおいて日本語予備教育を受けます。その後は、“Education Administration and management”や“Schools and educational practices in Japan”を受けます。同時に専門教育として指導教員のもとで個人指導を受け、各自の関心に基づいて研究をすすめます。研修期間修了時には研修の成果が最終報告書にまとめられ、修了式では学長から修了証書が授与されます。

また、学内行事への参加のみならず、各種学校訪問による国際交流、文化体験、研修旅行など日本の教育及び社会に関する見聞を広げるための様々な機会が用意されています。これらの行事を通じて、教育学学位プログラムの学生や教員だけではなく、地域の方々との交流もすすめています。

このように、外国人教員研修留学生の来学は教育学学位プログラムの国際化推進に大きな役割を果たしており、教育学学位プログラムの学生にとっても日本の教育を相対的に捉えなおす貴重な契機となっています。

修了要件

人間総合科学学術院 人間総合科学研究群 教育学学位プログラム（博士前期課程）

科目区分	科目群等	条件又は科目名等	修得単位数
基礎科目	学術院共通専門基盤科目	教育学理論研究 次世代教育開発研究 Theory of International Education	3
専門基礎科目	教育学関連科目	選択必修	18
専門科目	教育学関連科目	選択必修	9
		修了単位数	30

本学位プログラムを修了するには、2年以上在学し、学位プログラムごとに定める修了の要件として必要な授業科目の履修により所定の単位（30単位以上）を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査及び最終試験に合格することが必要です。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については1年以上在学すれば足りるとしています。

必要な授業科目のうち、専門基礎科目及び専門科目については、サブプログラム（次世代学校教育創成サブプログラムにおいてはサブプログラム内の領域）ごとに定められた履修方法に基づいて履修することとなっています。

なお、社会人特別選抜試験によって入学した者のうち、大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例の適用を希望する者は、1年次で昼間に開設される科目により24単位以上、2年次で夜間等に開設される科目（14条対応の科目）により6単位以上を修得することとなっています。上記特例の適用を受けようとする者は、当該年度当初に、指導教員とプログラムリーダーに履修計画書を提出します。

教育職員免許状および国際バカロレア教員資格（IB educator certificates）を取得しようとする者は、科目選択にあたって免許状取得、IB教員資格取得に必要な単位を満たすよう考慮してください。

※履修要件の詳細は、学位プログラムのwebサイトをご確認ください。

人間総合科学学術院 人間総合科学研究群 教育学学位プログラム（博士後期課程）

科目区分	条件	科目名等	修得単位数
基礎科目	必修	教育学特論Ⅰ（1単位） 教育学特論Ⅱ（1単位）	2
専門基礎科目	選択必修	教育学演習Ⅰ（1単位） 教育学演習Ⅱ（1単位） フィールドワーク研究（1単位）	1
専門科目	選択必修	研究法Ⅰ（3単位） 研究法Ⅱ（3単位） 研究法Ⅲ（3単位）	3
		修了単位数	6

本学位プログラムを修了するには、3年以上在学し、学位プログラムごとに定める修了の要件として必要な授業科目の履修により所定の単位（6単位以上）を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することが必要です。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については1年（修士課程早期修了者等にあっては当該課程における在学期間を含めて3年）以上在学すれば足りるとしています。

必要な授業科目としては、基礎科目を2単位、専門基礎科目を1単位以上、専門科目は専門研究領域の研究法Ⅰ～Ⅲから3単位を履修することとなっています。

※履修要件の詳細は、学位プログラムのwebサイトをご確認ください。

長期履修制度について

本学位プログラム（前期・後期）では、職業等に従事しながら学習を希望する人々（職業を有する者のほか、育児をする者、介護をする者を含みます）に対して、長期履修制度を導入しています。長期履修制度を希望する者は、入学手続き書類に同封されている内容をよく確認し、学位プログラムの責任者等と必ず事前に相談の上、申請様式を記入し、締切日までに提出します。個別審査の上、その計画的な履修を認めることとなります。

年度別学位授与数

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
総数(註1)	99	104	95	112	94	114	90	72	89
博士前期課程(修士課程 教育研究科)(註2)	90	79	77	106	77	103	79	48	68
国際教育 SP (教育研究科 教育学(国際教育)修士プログラム)	-	-	-	12	10	13	7	10	12
次世代学校教育創成 SP	90	79	77	94	67	90	66	33	46
学校教育領域	34	28	35	33	27	29	19	17	16
スクールリーダーシップ開発分野 (教育研究科 スクールリーダーシップ開発専攻)	17	18	19	20	15	20	13	13	8
英語教育分野(教育研究科 教科教育専攻 英語教育コース)	11	5	8	9	6	3	1	2	3
芸術科教育分野(教育研究科 教科教育専攻 芸術科教育コース)	4	1	2	3	1	2	2	1	2
保健体育教育分野(教育研究科 教科教育専攻 保健体育教育コース)	2	4	6	1	5	4	3	1	3
国語教育領域(教育研究科 教科教育専攻 国語教育コース)	12	11	8	8	6	15	4	4	2
社会科教育領域(教育研究科 教科教育専攻 社会科教育コース)	17	18	11	23	17	17	18	5	10
数学教育領域(教育研究科 教科教育専攻 数学教育コース)	11	10	9	14	6	14	8	5	9
理科教育領域(教育研究科 教科教育専攻 理科教育コース)	16	12	14	16	11	15	17	2	9
教育基礎科学 SP (博士前期課程 教育学専攻)	7	18	17	4	14	9	6	19	10
博士後期課程(註3)	2	7	1	2	3	2	5	5	1
教育基礎学専攻	1	1	1	2	1	0	2	2	2
学校教育学専攻	1	6	0	0	2	2	3	3	1

註1)前期末修了・年度末修了による授与数の合計で示す。
註2)旧組織のデータを含む。(　)内は対応する旧組織の名称です。
註3)博士の学位については、博士(課程修了)の数です。

年度別受験者・入学者数

	2020				2021				2022				2023				2024			
	志願	受験	合格	入学	志願	受験	合格	入学	志願	受験	合格	入学	志願	受験	合格	入学	志願	受験	合格	入学
博士前期課程	153	144	108	89	105	98	67	65	121	116	85	77	132	126	96	92	118	109	84	81
国際教育 SP	25	25	12	8	32	32	13	13	22	22	12	10	33	33	14	13	24	24	13	13
次世代学校教育創成 SP	107	99	83	68	51	44	38	36	74	70	60	54	72	66	60	58	74	66	56	54
学校教育領域																				
スクールリーダーシップ開発分野	23	21	17	13	17	17	13	12	15	15	13	10	16	13	11	10	19	17	16	16
英語教育分野	8	7	3	1	3	2	2	2	7	6	5	4	3	3	3	3	2	2	2	2
芸術科教育分野	3	3	3	2	2	1	1	1	2	2	2	2	1	1	1	1	2	1	0	0
保健体育教育分野	3	3	3	3	1	1	1	1	4	4	3	3	3	3	3	3	5	5	3	3
国語教育領域	8	7	5	4	6	6	5	4	5	4	3	3	9	8	7	7	7	7	6	5
社会科教育領域	24	22	21	19	9	7	7	7	14	13	13	12	19	17	16	16	13	12	11	11
数学教育領域	16	16	14	10	8	7	6	6	15	14	11	10	12	12	11	11	13	10	8	8
理科教育領域	22	20	17	16	6	4	4	3	12	12	10	10	9	9	8	7	13	12	10	9
教育基礎科学 SP	21	20	13	13	22	22	16	16	25	24	13	13	18	17	13	12	20	19	15	14
博士後期課程	27	27	20	20	23	23	19	18	28	28	19	18	27	27	22	21	18	18	17	15

担当教員一覧

筑波大学の教員は「系」と呼ばれる教員組織に所属しています。一部の系においては、学問領域に対応した「域」を設置しています。
教育学学位プログラムは人間系教育学域・心理学域をはじめ、人文社会系、数理物質系、生命環境系、体育系、芸術系に所属する教員も多数関わっており、各分野の最先端の研究・実践動向を踏まえた指導を行っています。
ここに掲載した担当教員に加え、多くの協力教員や非常勤講師等が指導に関わっています。

国際教育サブプログラム

浜田博文
人間系教育学域　教授
学校経営学／学校経営論、教師教育論、学校改善の研究

藤田晃之
人間系教育学域　教授
キャリア教育学／キャリア教育の比較研究（日･米･デンマーク）、教員養成制度研究

田中正弘
本部（教学マネジメント室）准教授
高等教育論／比較教育学・高等教育論（イギリス）

Tastanbekova Kuanysh（タスタンベコワ・クアニシ）
人間系教育学域　准教授
比較・国際教育学／先住民・少数民族・移民の言語教育政策、多文化教育、中央アジア諸国の教育、国際機関の教育政策

梅津静子
人間系教育学域　助教
比較・国際教育学／ IB の教育実践

川上若奈
人間系教育学域　助教
道徳教育学／ 19 世紀フランスの芸術教育思想／現代フランスの道徳教育、市民性教育、芸術教育／芸術と道徳の関係

菊地かおり
人間系教育学域　助教
比較・国際教育学／グローバル化と教育改革、シティズンシップ教育、移民・外国人の教育、国際理解教育

古田雄一
人間系教育学域　助教
教育政策学／市民性教育改革、生徒参加論、現代アメリカ教育改革

犬飼－ディクソンキャロル
客員教授
国際バカロレア教育／ IB の教授法、エージェンシーのための批判的思考の育成、第二言語習得論

次世代学校教育創成サブプログラム

学校教育領域

石﨑和宏
芸術系　教授
芸術科教育／美術鑑賞に関する発達研究、美術の学習理論、チゼックの美術教育論

佐藤有耕
人間系心理学域　教授
青年心理学／思春期、青年期、自己嫌悪感、友人関係

浜田博文 前掲

樋口直宏
人間系教育学域　教授
教育方法学／授業研究、批判的思考論、小中一貫教育

藤井穂高
人間系教育学域　教授
教育制度学／フランス教育制度、保育制度改革

上田孝典
人間系教育学域　准教授
社会教育・生涯学習論／アジア教育比較研究

Tastanbekova Kuanysh（タスタンベコワ・クアニシ）前掲

丹間康仁
人間系教育学域　准教授
生涯学習・社会教育学／地域教育経営論

徳永智子
人間系教育学域　准教授
教育社会学・教育人類学／移民と教育、越境と多文化共生、マイノリティの教育支援、エスノグラフィー

平田諭治
人間系教育学域　准教授
日本教育史／近現代日本の教育とナショナリズム／オリエンタリズム／コロニアリズム

宮﨑明世
体育系　准教授
体育科教育学／体育授業研究、保健体育授業における動作の習得、オリンピック・パラリンピック教育

朝倉雅史
人間系教育学域　助教
教師教育学／教師の職能発達論、教育専門職論

田中　怜
人間系教育学域　助教
カリキュラム学、教育方法学、ドイツ教授学

名畑目真吾
人間系教育学域　助教
英語教育学・応用言語学／小学校英語、リーディング、テキスト分析

古田雄一 前掲

国語教育領域

石塚　修
人文社会系言語コミュニケーション学域　教授
国語教育・日本文学／近世文学研究、古典教育論研究

橋本　修
人文社会系言語コミュニケーション学域　教授
日本語学、現代日本語の文法

馬場美佳
人文社会系人文学域　教授
日本近代文学／明治期の小説を中心とした文学研究

長田友紀
人間系教育学域　准教授
国語教育学、コミュニケーション教育

稀代麻也子
人文社会系人文学域　准教授
中国六朝文学／沈約を中心とする詩人の文学の研究

田川拓海
人文社会系言語コミュニケーション学域　准教授
日本語学、理論言語学（形態論、統語論）

那須昭夫
人文社会系言語コミュニケーション学域　准教授
日本語学・理論言語学／現代日本語の音韻論

吉森佳奈子
人文社会系人文学域　准教授
日本中古文学／日本文学史

今田水穂
人文社会系言語コミュニケーション学域　助教
日本語学、コーパス言語学

勝田　光
人間系教育学域　助教
読むことの学習指導、子どもの文学

菊池そのみ
言語コミュニケーション学域　助教
日本語学、日本語の文法史・語彙史

社会科教育領域

唐木清志
人間系教育学域　教授
社会科教育学／公民教育、シティズンシップ教育、サービス・ラーニング

國分麻里
人間系教育学域　教授
社会科教育学／歴史教育、朝鮮教育史、ジェンダー

山中　勤
生命環境系（地球環境科学）　教授
水文学・自然地理学／水・物質循環、環境教育

星野　豊
人文社会系（法学）　教授
法学／学校トラブルへの法的対処

五十嵐沙千子
人文社会系（哲学・思想）　准教授
現代思想／正義論・コミュニケーション論

金　玹辰
人間系教育学域　准教授
社会科教育学／地理教育／ケイパビリティ・アプローチ

谷口陽子
人文社会系（歴史・人類学）　准教授
保存科学、考古科学、文化遺産保存修復

森　直人
人文社会系（国際公共政策）　准教授
社会学／教育社会学、社会階層論

鈴木　創
人文社会系（国際公共政策）　講師
政治学／選挙研究、議会研究

森本健弘
生命環境系（地球環境科学）　講師
人文地理学／農業地理・農村地理、ICT と地理教育

上田裕之
人文社会系（歴史・人類学）　助教
歴史学／清朝史、中国貨幣史

数学教育領域

礒田正美　※ 2025 年 3 月退職予定
人間系教育学域　教授
数学教育学／数学的活動・数学化研究、数学史・テクノロジ利用研究、教育課程基準・教科書・指導法の国際協同開発研究

川村一宏
数理物質系数学域　教授
数学（位相幾何学）／幾何学的トポロジー

清水美憲
人間系教育学域　教授
数学教育学／数学科授業・カリキュラムの国際比較研究、生徒の学習到達度国際調査研究（OECD-PISA）、学習者の数学的思考に関する認知的研究

竹山美宏
数理物質系数学域　教授
数学（解析学）／特殊関数論、数理物理学、数論

増岡　彰
数理物質系数学域　教授
数学（代数学）／ホップ代数，量子群

木下　保
数理物質系数学域　准教授
数学（微分方程式）／弱双曲型方程式系の研究

小松孝太郎
人間系教育学域　准教授
数学教育学／学校数学における証明、課題設計、ICT 利用

塩谷真弘
数理物質系数学域　准教授
数学（数理論理学）／公理的集合論

照井　章
数理物質系数学域　准教授
数学（計算機数学）／計算機代数、数式・数値融合計算

蒔苗直道
人間系教育学域　准教授
数学教育学／数学教育史、戦後改革期の単元学習

木村健一郎
数理物質系数学域　講師
数学（代数幾何学）／代数的サイクル、モチーフ

理科教育領域

角替敏昭
生命環境系地球科学域　教授
岩石学／先カンブリア時代の地質学

野村港二　※ 2025 年 3 月退職予定
生命環境系農学域　教授
植物細胞工学／テクニカルコミュニケーション

受川史彦
数理物質系・物理学域　教授
素粒子物理学（実験）

矢花一浩　※ 2025 年 3 月退職予定
計算科学研究センター　教授
計算物質科学、原子核理論

上松佐知子
生命環境系地球科学域　准教授
地史学・古生物学／古生代微古生物学、層序学

石川　香
生命環境系生物学域　准教授
細胞生物学／ミトコンドリア生物学

一戸雅聡
数理物質系化学域　准教授
有機化学、典型元素化学

興野　純
生命環境系地球科学域　准教授
鉱物学／結晶合成、構造解析と物性評価

佐藤智生
数理物質系化学域　准教授
物理化学、界面光化学／メゾスコピック組織体の光物理化学

澤村京一
生命環境系生物学域　准教授
進化遺伝学

出川洋介
生命環境系生物学域　准教授
菌類系統分類学／菌類（カビ、キノコ）の系統分類、生態、自然史に関する研究

中山　剛
生命環境系生物学域　准教授
原生生物系統分類学

野村晋太郎
数理物質系物理学域　准教授
ナノメートル構造の光物性、量子センシング

藤野滋弘
生命環境系地球科学域　准教授
堆積学・地層学／堆積環境・過去の地震と津波

森下将史
数理物質系物理学域　准教授
低温物理学／量子流体・量子固体における低次元量子物性

森　正夫
計算科学研究センター　准教授
宇宙物理学／銀河形成・進化、ダークマター、計算科学

山本容子
人間系教育学域　准教授
理科教育学／生物教育、環境教育論

吉川正志
数理物質系物理学域　准教授
プラズマ物理・核融合研究

長友重紀
数理物質系化学域　講師
生物無機化学／金属イオンを含むタンパク質の機能と構造に関する研究

八畑謙介
生命環境系生物学域　講師
動物系統分類学／節足動物多足類の系統分類と進化

遠藤優介
人間系教育学域　助教
理科教育学／理科教育目的論、ドイツ科学教育論

横井智之
生命環境系生物学域　助教
昆虫生態系・行動生態学／昆虫類の採餌戦略・生活史に関する研究

教育基礎科学サブプログラム

礒田正美　前掲

大谷　奨
人間系教育学域　教授
教育計画論 / 教育制度整備過程の研究、学校設置者論

唐木清志　前掲

國分麻里　前掲

清水美憲　前掲

浜田博文　前掲

樋口直宏　前掲

藤井穂高 前掲
藤田晃之 前掲
上田孝典 前掲
長田友紀 前掲
金　玹辰 前掲

京免徹雄
人間系教育学域　准教授
特別活動学／特別活動の国際化、特別活動・キャリア教育・生徒指導の日仏比較 シティズンシップ教育としてのキャリア教育

小松孝太郎 前掲
Tastanbekova Kuanysh（タスタンベコワ・クアニシ）前掲
田中正弘 前掲

田中マリア
人間系教育学域　准教授
道徳教育学／18 世紀フランスの啓蒙思想家 J.J.Rousseau の教育思想について、その人格形成論における宗教と道徳の関係の把握、解明

丹間康仁 前掲

徳永智子 前掲

平井悠介
人間系教育学域　准教授
教育哲学／現代英米圏シティズンシップ教育論と社会的平等に関する研究

平田諭治 前掲
蒔苗直道 前掲
山本容子 前掲
朝倉雅史 前掲
遠藤優介 前掲
勝田　光 前掲
川上若奈 前掲
田中　怜 前掲
名畑目真吾 前掲
古田雄一 前掲

博士後期課程

礒田正美 前掲
大谷　奨 前掲
唐木清志 前掲
國分麻里 前掲
清水美憲 前掲
浜田博文 前掲
樋口直宏 前掲
藤井穂高 前掲
藤田晃之 前掲
上田孝典 前掲
長田友紀 前掲
金　玹辰 前掲
京免徹雄 前掲
小松孝太郎 前掲
Tastanbekova Kuanysh（タスタンベコワ・クアニシ）前掲
田中正弘 前掲
田中マリア 前掲
徳永智子 前掲
平井悠介 前掲
平田諭治 前掲
蒔苗直道 前掲
山本容子 前掲
遠藤優介 前掲
勝田　光 前掲
菊地かおり 前掲
名畑目真吾 前掲

入試情報の入手

博士前期課程は10月、博士後期課程は10月と2月に入学試験を実施します。博士前期課程は2月に二次募集を行うこともありますが、必ず実施するとは限りません。また、入試に関する日程は毎年異なります。以下の募集要項webサイトにて事前に確認の上、受験してください。出願関係書類もこちらからダウンロードできます。

筑波大学大学院募集要項webサイト：http://www.ap-graduate.tsukuba.ac.jp/

お問い合わせ

本学位プログラムへのお問い合わせは、教育学学位プログラムのwebサイトをご覧のうえ、webサイト内のお問い合わせフォームよりお願いいたします。

学位プログラム webサイト

『教育学学位プログラム』（本パンフレット）の送付をご希望の方は、封筒に「資料請求申込書在中」と明記の上、以下の二点をお送りください。

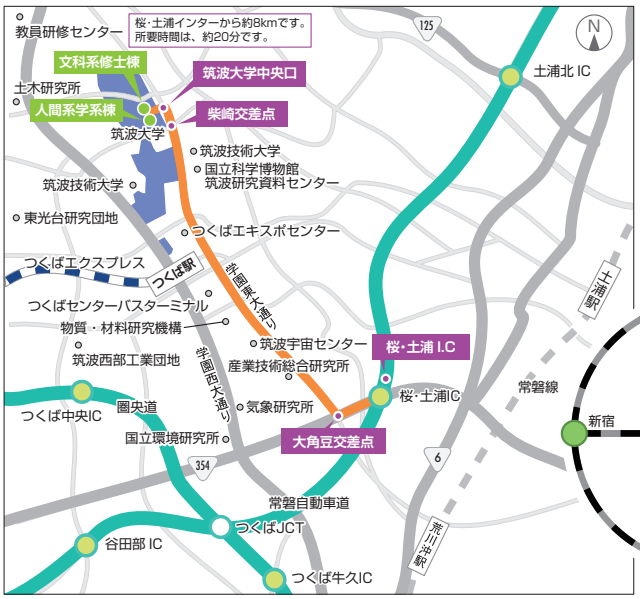
1．資料請求申込書（学位プログラムwebサイトよりダウンロードできます）または郵便番号、住所、氏名、電話番号と請求する資料の部数を記載したメモ
2．返信用の角形2号封筒（宛先明記の上、215円切手を貼付）

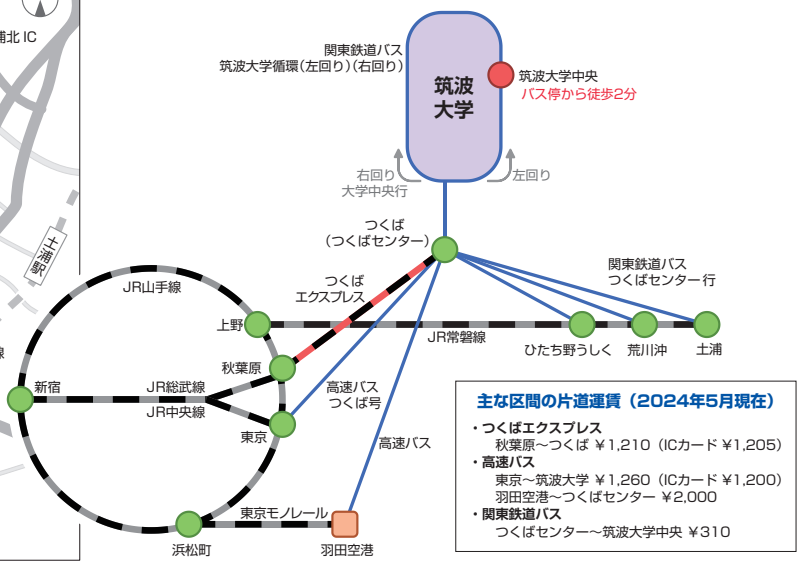
〈宛　先〉〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学大学院教育学学位プログラム広報担当（人間系・教育学域内）

交通案内

公共交通機関をご利用の場合は、つくばエクスプレス、JR常磐線、高速バス等をご利用ください。車でお越しの場合は常磐道や圏央道の利用が便利です。大学構内の駐車場は数に限りがあり、臨時入構手続き（有料）が必要となりますので、なるべく公共交通機関をご利用ください。

教育学学位プログラム関連の建物は、筑波キャンパス中地区にある文科系修士棟B棟及び人間系学系棟（4・5階）になります。（文科系修士棟…国際教育SP及び次世代学校教育創成SP、人間系学系棟…教育基礎科学SP及び博士後期課程）最寄りバス停はいずれも「筑波大学中央」（高速バスの場合は「筑波大学」）です。





筑波大学
University of Tsukuba

教育学学位プログラム

編集・発行　筑波大学人間総合科学学術院
人間総合科学研究群
教育学学位プログラム

発行年月　2024年6月